埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第173集

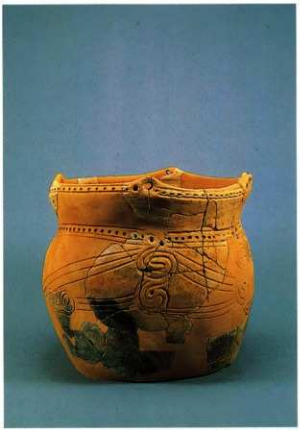
大宮市

今羽丸山遺跡

県営大宮今羽団地関係埋蔵文化財発掘調査報告

1996

財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団



第１号土壙遺物出土状況・出土土器

序

埼玉県では多様化する県民の住宅需要に対応し、居住水準及び住環境の水準の一層の向上を図るため、総合的な住宅対策を進めております。

このたび、県住宅都市部が大宮市今羽町に建設することになった県営大宮今羽団地においては、良質な住宅の供給により、県民の居住水準の向上に資することが期待されております。

ところで、県南部地域は他の地域と同様、多くの埋蔵文化財の所在が確認されております。住宅建設予定地にも今羽丸山遺跡が所在しておりました。そこで関係各機関が慎重に協議を重ねてまいりましたが、当事業団が発掘調査を実施し、その記録を保存することになりました。

発掘調査の結果、旧石器時代、縄文時代、弥生時代、平安時代、中・近世の遺構、遺物が発見されました。

縄文時代、弥生時代、平安時代については竪穴住居跡が見つかっており、長い年代の折々に先人の生活の舞台としてこの地が利用されていたことがわかっています。

また、各時代の遺物は地域の歴史を考える上で欠かせない資料と言えます。特に縄文時代後期前葉の竪穴住居跡や土壙から出土した土器群の組みあわせは、当地域における指標のひとつとなるものであり、東北地方との交流を知る上でも良好な資料といえます。

本書はこれらの成果をまとめたものです。埋蔵文化財の保護、学術研究の基礎資料として、また埋蔵文化財の普及・啓発及び教育機関の参考資料として広く活用いただけることを願ってやみません。

刊行にあたり、発掘調査に関する諸調整に御尽力をいただきました埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課をはじめ、発掘調査から報告書刊行に至るまで御協力をいただきました埼玉県住宅都市部住宅建設課、大宮市教育委員会並びに地元関係者各位に深く感謝申し上げます。

平成８年３月

財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団

理事長　荒井　桂

例言

1．本書は大宮市今羽117番地２他に所在する今羽丸山遺跡の発掘調査報告書である。発掘調査届けに対する通知は埼玉県教育委員会教育長からの平成６年５月17日付け教文第２－21号である。
2．遺跡名の略号は、KNBである。
3．発掘調査は県営大宮今羽団地建設に伴う事前調査であり、埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課が調整し、埼玉県住宅都市部住宅建設課の委託により、県埋蔵文化財調査事業団が実施した。
4．発掘調査は当事業団の新屋雅明、大屋道則が担当して、平成６年４月１日から平成６年９月30日まで実施した。整理報告書作成作業は新屋雅明が担当し、平成７年10月１日から平成８年３月31日まで行った。発掘調査と整理作業の組織は第Ⅰ章に記述した。
5．遺跡の基準点測量、航空写真は新日本航空株式会社に委託した。遺物の巻頭カラー写真、上器展開写真は小川忠博氏に委託した。
6．発掘調査時の遺構撮影と遺物の写真撮影は新屋、大屋が行った。
7．出土品の整理および図版の作成は新屋、福田型、小林あいが行った。本書の執筆はⅠ－1を埼玉県生涯学習部文化財保護課が、他を新屋が行い、Ⅳ－１の先土器時代の遺物について小林が、Ⅳ－３・4の弥生時代・平安時代の遺物について福田が行った。また、Ⅴ－１を新屋、Ⅴ－２を福田が執筆した。
8．本書の編集は、資料部資料整理第１課の新屋がおこなった。
9．本書にかかる資料は平成７年以降県立埋蔵文化財センターが保管する。
10．本書の作成にあたり下記の方々から御教示、御協力を賜った（敬称略）。

笹森紀己子　下村克彦　田代　治　山形洋一
大宮市教育委員会

凡例

1．X・Y座標による表示は、国家標準直角座標第Ⅸ系に基づく座標値を示し、方位は全て座標北を表す。
2．縮尺は遺構図、遺物出土状況図を１：60、１：30で示し、縄文土器実測図を１：５、１：４、拓影図を１：３、弥生土器、平安時代の土器を１：４、石器を２：３で示した。例外については挿図中にスケールで示した。
3．全測図等に示す遺構の略号は以下のとおりである。
　住居＝SJ　土壙＝SK　溝＝SD
4．遺構名称の新旧は第１表に示した。
5．以下の挿図については各々の範囲を網掛けで示した。

遺構平面図	―	焼土
縄文土器展開図	―	縄文施文部
弥生土器実測図	―	赤色塗彩の部分
平安時代の土器実測図	―	吸炭処理の部分

6．先土器時代、縄文時代の遺物分布図に記号を用いた。種別はそれぞれ挿図中に示した。

目次

口絵
序
例言
凡例
I　調査の概要……1
　1　調査に至る経過……1
　2　発掘調査・報告書作成の経過……2
　3　発掘調査・報告書刊行事業の組織……3
II　立地と環境……4
III　遺跡の概要……7
IV　遺構と遺物……9
　1　先土器時代……9
　2　縄文時代……24
　3　弥生時代……43
　4　平安時代……46
　5　中・近世……48
V　結語……52

表目次

第1表　遺構一覧…… 8
第2表　出土石器一覧 …… 18
第3表　土器観察表 …… 47

挿図目次

第1図　埼玉の地形…… 4
第2図　周辺の遺跡…… 5
第3図　遺跡位置図…… 6
第4図　遺構全体図…… 7
第5図　先土器時代の調査…… 9
第6図　土層断面図 …… 10
第7図　遺物分布図……11
第8図　石器集中1 …… 12
第9図　石器集中2 …… 14
第10図　石器集中3 …… 14
第11図　石器集中4 …… 15
第12図　出土石器(石器集中1～3) …… 16
第13図　出土石器(石器集中4・単独) …… 17
第14図　第1号住居跡 …… 25
第15図　第1号住居跡遺物分布図 …… 26
第16図　第1号住居跡出土遺物(1) …… 26
第17図　第1号住居跡出土遺物(2) …… 27
第18図　第2号住居跡 …… 28
第19図　第2号住居跡出土遺物 …… 28
第20図　土壙 …… 29
第21図　第1号土壙　出土状況・出土土器 …… 30
第22図　第2号土壙　出土状況・出土土器 …… 32
第23図　土壙出土遺物(1) …… 34
第24図　土壙出土遺物(2) …… 35
第25図　遺構外出土遺物(1) …… 36
第26図　遺構外出土遺物(2) …… 37
第27図　遺構外出土遺物(3) …… 39
第28図　遺構外出土遺物(4) …… 40
第29図　遺構外出土遺物(5) …… 41
第30図　遺構外出土遺物(6) …… 42
第31図　遺構外出土遺物(7) …… 42
第32図　第3号住居跡 …… 44
第33図　第3号住居跡出土遺物 …… 45
第34図　第4号住居跡 …… 46
第35図　第4号住居跡出土遺物 …… 47
第36図　溝 …… 49
第37図　土壙 …… 50
第38図　今羽丸山遺跡出土土器 …… 53
第39図　北塚屋遺跡107号土壙出土土器……54
第40図　参考資料 …… 55

図版目次

図版1　遺跡全景
図版2　遺跡近景　遺構確認時
　　遺跡近景　完掘時
図版3　先土器時代　出土石器
図版4　第1号住居跡
　　第1号住居跡炉跡　遺物出土状況
図版5　第2号住居跡
　　第1号土壙確認時
　　第1号土壙の調査
　　第1号土壙遺物出土状況
　　第1号土壙完掘
図版6　第2号・第3号土壙
　　第4号土壙
　　第5号土壙
　　第7号土壙
　　第8号土壙
　　第9号土壙
　　第10号土壙
　　第11号土壙
図版7　第1号住居跡出土土器
図版8　第2号住居跡出土土器
　　第1号土壙出土土器
　　第2号～第5号土壙出土土器
図版9　第7号・第8号土壙出土土器
　　第2号土壙出土土器
　　第7号土壙出土土器
図版10　遺構外出土遺物
図版11　遺構外出土遺物
図版12　遺構外出土遺物
図版13　縄文土器展開写真（撮影・小川忠博氏）
　　第1号住居跡出土土器
　　第1号土壙出土土器
図版14　第3号住居跡完掘状況
　　第3号住居跡遺物出土状況
図版15　第3号住居跡出土土器
図版16　第4号住居跡検出状況
　　第4号住居跡カマド検出状況
図版17　第4号住居跡出土遺物
図版18　第1号～第3号溝
　　第1号溝
　　第2号溝
　　第1号・第3号溝
　　第3号溝（南から）
　　第3号溝（北から）
図版19　第14号土壙
　　第15号土壙
　　第20号土壙
　　第21号土壙
　　第24号土壙
　　第26号土壙
　　第27号土壙
　　第29号土壙

Ⅰ　調査の概要

1　調査に至る経過

本県では首都圏に隣接するという地理的な関連から、近年の人口増加には著しいものがある。特に県南地域の増加率には急激なものがあり、市街地は急速に周辺地域へと拡大しているのが現状である。急激な都市化に付随して、様々な行政的な問題が表出しているが、とりわけ住宅の確保についての要望が多くなっている。こうした状況を鑑み、埼玉県では各種の都市・土地政策を通じて県民の要望に答えるべく迅速な対応を行っているが、住宅政策もその一環として位置づけられている。

県教育局生涯学習部文化財保護課では、文化財保護の観点よりこうした公共事業開発に対して迅速且つ、適切な調整を行う為、国や県の開発関係部局や公社・公団と事前協議を実施し、遺漏のないよう慎重に調整を進めているところである。

大宮市今羽地内で建設計画の立てられた大宮今羽団地については、事業主体者である県住宅建設課が平成4年1月19日付住建設第1057号で、埋蔵文化財の所在の有無及び取扱いついての照会があった。この為、県文化財保護課では対象地に於ける埋蔵文化財の所在が不明であったので確認調査を実施し、縄文時代の遺物・遺構を確認した。この段階で、県文化財保護課では周知の埋蔵文化財包蔵地として新規に登録し、県住宅建設課長あて次のとおり回答した。

1　事業予定地内には大宮市NO.468遺跡が所在する。

2　上記の埋蔵文化財包蔵地は現状保存することが望ましいが、事業計画上やむを得ず現状を変更しようとする場合には、事前に当課と協議すること。

その後、文化財保護課では住宅建設課と調整を重ねる過程で、文化財包蔵地を計画より除外して、何とか保存措置を講ずることができないか協議を行ったが、事業の趣旨やその緊急性より記録保存の措置が適切との結論に至った。

発掘調査については、(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団を交えて、埼玉県住宅建設課、文化財保護課の三者により、調査期間、調査方法、調査経費等について協議を重ね、平成6年4月1日より発掘調査を実施することが決定された。

その後、平成6年4月28日に埼玉県知事より、住建第169号で発掘届が提出され、埼玉県埋蔵文化財調査事業団理事長より平成6年4月1日付財埋文9号で発掘調査届が文化庁長官あて提出され、折り返し文化庁より平成6年11月10日付け委保第5―5357号で受理通知があった。

(文化財保護課)

2　発掘調査・報告書作成の経過

発掘調査

平成６年４月１日から９月30日までの６か月間にわたって、今羽丸山遺跡の発掘調査を実施した。

４月上旬。現地にて、県住宅都市部住宅建設課担当者と当事業団担当者の打ち合わせを行う。

重機による表土の掘削を開始する。現場事務所のプレハブを敷地の北側に設置することとして、これに至る搬入路の準備や囲柵工事等の作業を実施する。これらに並行して、補助員の募集を行う。

４月中旬から下旬。中旬は引き続き本格的な発掘調査に向けての準備を行う。重機による表土掘削は調査区の東側から行い、南西側の端に残土の仮置きをする。下旬には重機による表土掘削やプレハブの設置が完了する。

５月。敷鉄板による搬入路の設置、発掘器材の搬入、方眼杭の設置を行う。こうした調査の準備にめどがついた中旬から補助員による発掘作業を開始する。遺構精査から着手する。

６月。遺構精査を引き続き行う。南東部を中心に縄文時代後期前葉の土器片の出土がある。縄文時代の住居跡と土壙、弥生時代の住居跡などが確認された。遺構の分布もおおよそ把握されたので、もっとも新しいと思われた溝から調査を開始する。弥生時代の住居跡の調査にも着手する。

７月。調査区の南東部に主として分布する縄文時代後期の遺構の調査に着手する。木の根が多く、その除去を行う。また縄文時代や中・近世の土壙の調査も実施する。

溝や弥生時代の住居跡については平面図等の作成を行う。７月末には写真撮影も含めたこれらの作業が収束に向かう。

８月。上旬には航空写真撮影を実施する。航空写真撮影後、南西側に仮置きした表土掘削の残土を調査の終了した東側の一部に反転し、南西側の表土掘削を行う。この調査区南西部では縄文時代後期の土器はあまり散布していなかった。精査を行い、溝の続きを確認し、調査を行った。

また、調査区西端のＥ２、Ｆ２グリッドにおいて平安時代の住居跡を確認し、調査を行った。

溝と平安時代の住居跡の調査に並行して、先土器時代の調査に着手する。ソフトローム中に石器集中が認められた。ハードローム層も調査を行ったが、石器集中の検出には至らなかった。Ｄ３・４グリッド周辺、Ｆ４・Ｇ４グリッド周辺のソフトローム中において石器集中が検出された。これらの石器集中の平面分布図の作成、土層断面図の作成を行う。

９月。引き続き先土器時代の調査を行う。中旬に発掘作業が終了する。下旬には発掘器材の搬出、事務所等の設備の撤去を行い、発掘調査事業の全行程を終了する。

整理作業

平成７年10月１日から平成８年３月31日の６か月間にわたって実施した。

10月、出土遺物の水洗い・注記・接合作業を行った。同時に発掘調査で作成した平面図、断面図、全体図等の図面類、遺構の写真類の整理を行った。

11月、遺構の第２原図の作成を行い、一部はトレースに着手した。遺物は接合・復元を行った後、分類して拓本、実測作業を行った。

12月、遺構図の版組作業、遺物のトレース作業、遺物の写真撮影を行った。また原稿の執筆も行った。

１月から３月は遺物実測図の版組、写真図版作成を行った。これに並行して、原稿執筆・割付の作成を行った。入稿後校正作業を行い、平成８年３月に報告書を刊行した。

3　発掘調査・整理・報告書刊行の組織

主体者　財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団

(1)発掘調査（平成６年度）

理事長	荒井　桂
副理事長	富田真也
専務理事	栃原嗣雄
常務理事 兼管理部長	加藤敏昭
理事 兼調査部長	小川良祐
管理部	
庶務課長	及川孝之
主査	市川有三
主事	長滝美智子
主事	菊池　久
専門調査員 兼経理課長	関野栄一
主任	江田和美
主事	福田昭美
主事	腰塚雄二
調査部	
調査部副部長	高橋一夫
調査第二課長	大和　修
主任調査員	新屋雅明
調査員	大尾道則

(2)整理事業（平成７年度）

理事長	荒井　桂
副理事長	富田真也
専務理事	吉川國男
常務理事 兼管理部長	新井秀直
理事 兼調査部長	小川良祐
管理部	
庶務課長	及川孝之
主査	市川有三
主任	長滝美智子
主事	菊池　久
専門調査員 兼経理課長	関野栄一
主任	江田和美
主任	福田昭美
主任	腰塚雄二
資料部	
資料部長	塩野　博
主幹 兼資料部副部長 兼資料整理第一課長	谷井　彪
主任調査員	新屋雅明

II　立地と環境

今羽丸山遺跡は大宮市北部の今羽町に所在する遺跡である。大宮駅から約4.8km の位置にある埼玉新都市交通今羽駅の北北東500m の位置にある。

発掘前の調査区の現状は山林であり、遺跡の周辺には畑地が広がっている。この地域は従来、近郊農村地域であったが、昭和58年の埼玉新都市交通開通後は住宅建設などが進行しており、現在では市街地へと変貌しつつある。

今羽丸山遺跡の立地する大宮台地は埼玉県の東部を占めており、中川低地によって下総台地と隔てられている。また、大宮台地の西側は荒川低地によって武蔵野台地と隔てられた位置にある（第１図）。

台地の中には元荒川や綾瀬川、芝川、鴨川などの中小河川が台地を開析しており、大宮台地は６つの支台に分かれている。今羽丸山遺跡は狭義の大宮台地（大宮主台）北東縁部に位置しており、芝川の谷の対岸には大和田片柳支台がある。

遺跡の規模は南北約200m、東西約120m ほどで、標高13m 前後のローム台地上に立地している。沖積地との比高差は２～３m である。遺跡の東側は芝川の谷が南北に延び、調査区の南東部はごく緩く東へ傾斜している。北側は東西方向に小支谷が入り込んでおり、調査区北側はこの小支谷に続く斜面となっている。

今回の調査区の南側に隣接する部分を平成５年に大宮市教委員会が調査を行っている（第３図）。市教育委員会の調査では縄文時代後期の土器片の他、中世から近世にかけての遺構が見つかっており、陶磁器、板石塔婆などが発見されている。

遺跡の東側には中世の板石塔婆11基が現存する浄土宗真福寺がある。市教育委員会の調査結果から、「かつての真福寺の領域は現在よりも大きかったと推定」（田代　小川1995）されている。

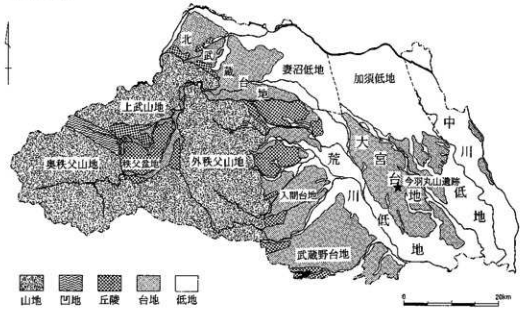
周辺には各時代の遺跡が分布している（第２図）。

当遺跡の北東約1.3km には吉野原遺跡(2)がある（大宮市1968）。先土器時代の尖頭器、礫器、掻器、剥片が出土している。また弥生時代後期の集落跡として知られている。

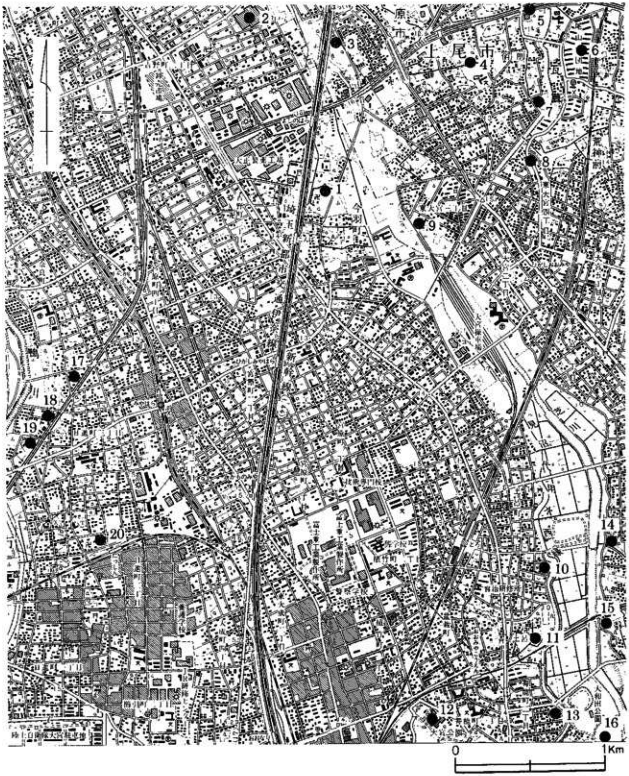
対岸の大和田片柳支台には大宮市から上尾市域にかけて多くの遺跡が分布している（第２図３～９）。

三番耕地遺跡(3)は先土器時代から近世の遺物が出

第１図　埼玉の地形



第2図　周辺の遺跡



1 今羽丸山遺跡　2 吉野原遺跡　3 三番耕地遺跡　4 宿前Ⅲ遺跡　5 秩父山遺跡　6 尾山台遺跡　7 宿前Ⅰ遺跡
8 東北原遺跡　9 高台山遺跡　10 土呂東遺跡　11 土呂陣屋跡　12 大宮公園内遺跡　13 寿能城址　14 鷲山遺跡
15 大和田本村遺跡　16 寿能泥炭層遺跡　17 B—101号遺跡　18 西谷裏遺跡　19 日進西谷遺跡　20 上加遺跡

上しており、特に古墳時代前期の住居跡が見つかり、良好な遺物を出土している(青木　鈴木1985)。

宿前Ⅲ遺跡では先土器時代のナイフ形石器と縄文時代中・後期の住居跡、土壙が見つかっている(小宮山1995)。秩父山遺跡(5)では縄文時代中期、弥生時代、古墳時代の集落跡が発掘され、中世の板石塔婆14点が出土している(赤石1978)。尾山台遺跡(6)では弥生時代後期から古墳時代前期の住居跡60軒が発掘されている(上尾市1992)。宿前Ⅰ遺跡(7)からは縄文時代早・前期の遺物が出土している(上尾市1992)。東北原遺跡(8)は先土器時代から縄文時代の遺跡であるが、特に縄文時代後・晩期の遺跡として知られており、当期の住居跡と動物型土製品をはじめとする良好な出土遺物が見つかっている(立木　山形1985　立木　森下1986)。

芝川の下流に目を転じると、左岸には先土器時代の6箇所のユニットと縄文時代早期の遺物が見つかった鷲山遺跡(14　立木他1983)、縄文時代早期の高台山遺跡(9)、弥生時代の集落跡として知られる大和田本村遺跡(15　大宮市1968)等が分布している。

芝川右岸には古墳時代の土器が見つかっている土呂東遺跡(10　大宮市1968)、歴史時代の土呂陣屋跡(11)・寿能城址(13)、大宮公園遺跡(12　立木　田代他1983)等が分布しており、芝川低地の一角には寿能泥炭層遺跡(16　埼玉県教育委員会1984)がある。大宮公園内遺跡では縄文時代中期の住居跡や弥生時代後期から古墳時代前期の住居跡、方形周溝墓が発掘されている。寿能泥炭層遺跡では縄文時代早期から平安時代の遺物が出土している。

大宮主台の鴨川沿岸にはB—101号遺跡、西谷裏遺跡、日進西谷遺跡、上加遺跡など縄文時代の遺跡が分布している(第2図17～20)。B—101号遺跡では中期の住居跡が見つかっている(山形　渡辺1989)。

第3図　遺跡位置図

III　遺跡の概要

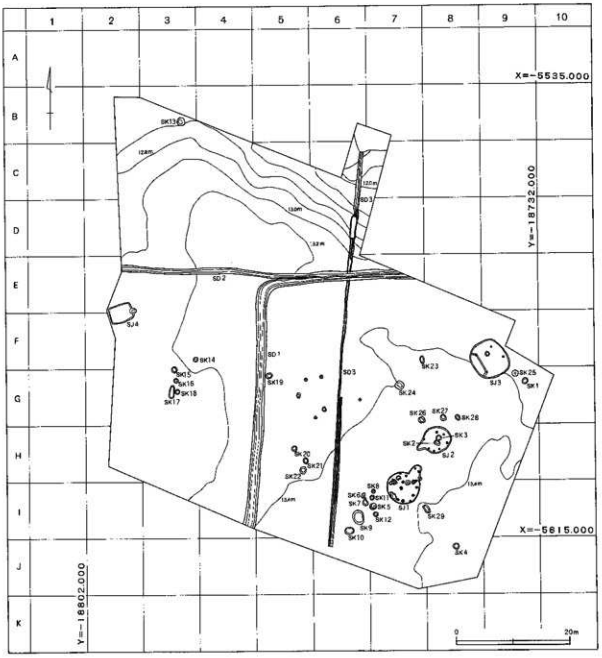
今羽丸山遺跡の今回の調査は遺跡の北東部分について実施したものであり、調査面積は4900m² である(第3図)。

第4図に全体図を示した。

調査区南半については、南側の大宮市調査区につながるほぼ平坦な台地頂部が広がっている。遺構確認面であるローム面の標高は調査区の南東部で最も高く13.4mである。調査区の東側には切り通しの道路がおおよそ南北に走っており、この付近からさらに東側は芝川の谷に続く緩斜面となっている。

一方、調査区の中央から北東部にかけては、北側の小支谷へとローム面が傾斜している。C6グリッドで

第4図　遺構全体図



最も低く、標高11.6mである。

検出された遺構、遺物は先土器時代、縄文時代、弥生時代、平安時代、中・近世の各時代にわたっている。

先土器時代の石器集中は調査区中央部付近のソフトローム層中から4箇所検出されている。出土石器にはナイフ形石器、尖頭器、掻・削器、石核、剥片があり、黒曜石の微細な砕片が多く見つかっている。

縄文時代の遺物は調査区の南東部、H・I区の7・8列近辺に縄文時代後期前葉の土器片が分布していた。遺構も南東部にまとまっている。住居跡2軒と土壙11基が見つかっている。

住居跡は張り出し部を有する形態である。後期前葉の所産である。上壙は出土遺物が少ないものも含んでいるが、おおむね当期の所産とみなされる。土壙のうち第1号土壙では後期前葉の土器2個体を含む資料が出土している。遺構外出土の土器は後期前葉の所産が主体であり、早期～中期、後期中葉の土器が少量出土している。また、石器が少量出土している。

弥生時代の住居跡はF8・9、G8・9グリッドから見つかっている。楕円の平面形の住居跡であり、台付甕、壺、高坏などが出土している。この住居跡以外に当期の遺構は認められなかった。

平安時代の住居跡はE2、F2グリッドから見つかっている。長方形の住居跡である。甕、坏、支脚、砥石が出土している。

中・近世の遺構として、溝3条、土壙18基が見つかっている。溝は南北と東西方向に延びている。第1号溝は大宮市調査(田代　小川1995)の第1号溝につながる遺構と思われる。遺構内からの出土遺物にとぼしく、溝、土壙の時期を限定することができない。大宮市調査区においては中・近世の陶磁器、かわらけ、板石塔婆などが包含層から出土しているが、今回の調査区においては中・近世の遺構外の遺物は皆無であった。

次章より、時期毎に報告を行う。調査時の遺構番号は報告にあたって、第1表のとおりに名称をふりなおした。

第1表　遺構一覧

名称	記号	旧記号	時期
住居跡			
第1号住居跡	SJ1	SJ2	縄文時代
第2号住居跡	SJ2	SJ3	〃
第3号住居跡	SJ3	SJ1	弥生時代
第4号住居跡	SJ4	SJ4	平安時代
土壙			
第1号土壙	SK1	SK2	縄文時代
第2号土壙	SK2	SJ3P1	〃
第3号土壙	SK3	SJ3P4	〃
第4号土壙	SK4	SK12	〃
第5号土壙	SK5	SK20	〃
第6号土壙	SK6	SK22	〃
第7号土壙	SK7	SK23	〃
第8号土壙	SK8	SK18	〃
第9号土壙	SK9	SK4	〃
第10号土壙	SK10	SK5	〃
第11号土壙	SK11	SK19	〃
第12号土壙	SK12	SK21	中・近世
第13号土壙	SK13	SK17	〃
第14号土壙	SK14	SK29	中・近世
第15号土壙	SK15	SK25	〃
第16号土壙	SK15	SK26	〃
第17号土壙	SK17	SK28	〃
第18号土壙	SK18	SK27	〃
第19号土壙	SK19	SK16	〃
第20号土壙	SK20	SK13	〃
第21号土壙	SK21	SK14	〃
第22号土壙	SK22	SK15	〃
第23号土壙	SK23	SK9	〃
第24号土壙	SK24	SK3	〃
第25号土壙	SK25	SK1	〃
第26号土壙	SK26	SK6	〃
第27号土壙	SK27	SK8	〃
第28号土壙	SK28	SK7	〃
第29号土壙	SK29	SK10	〃
溝			
第1号溝	SD1	SD1	中・近世
第2号溝	SD2	SD2	〃
第3号溝	SD3	SD3	〃

Ⅳ　遺構と遺物

1　先土器時代

（1）概略

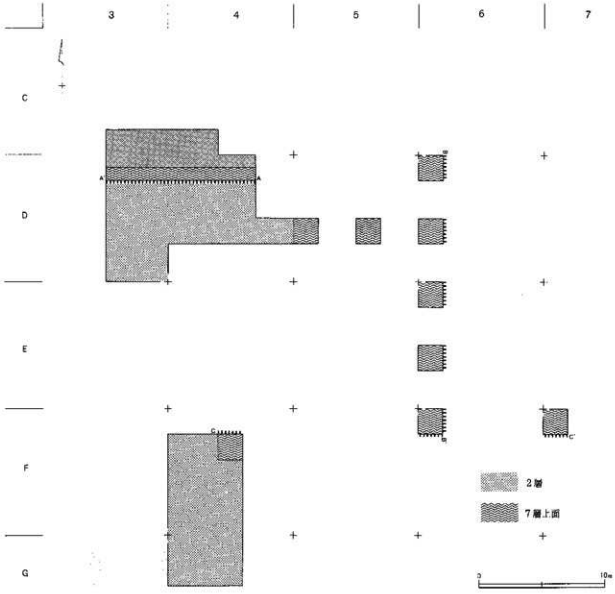
先土器時代の調査は第５図のように実施し、石器集中４箇所が発見された。いずれもソフトローム（第６図２層）からの出土である。より下層についても調査を実施したが、出土遺物はなかった。

また、グリッド５列以東ではＥ５グリッドにおいてナイフ形石器が単独出土した以外には石器の出土はなかった。

石器集中１～３はＤ３・４グリッドを中心に見つかっている。これらは15mの範囲の中に隣接している。石器の分布に濃淡があり、中心的部分が見られることから３つのまとまりとして捉えた（第７図）。石器集中４はＦ・Ｇ４グリッドにおいて見つかっている。

出土石器にはナイフ形石器、尖頭器、掻・削器、石核、剥片、砕片などがあり、石材は黒曜石を主体としてチャートを少量含んでいる。

第５図　先土器時代の調査



（2）層位

当遺跡のローム層序を第6図に示した。A—A'の土層断面図は調査時の図面を反転して掲載した。

B—B'の断面に見るように、調査区の中央部から北側に向かって台地は傾斜しており、台地頂部で7層に分層することができた層序は北側で減少する傾向にある。

B—B'の最も北側では第6層までソフト化が及んでいる。また、台地頂部ではソフトロームが厚くなる傾向があった。第5層がいわゆる第2黒色帯に相当する層位と考えられ、第1黒色帯はソフト化の影響か識別し得なかった。

ローム層序は1～7層に分かれる。内容は以下のとおりである。

1層は暗黒褐色のローム漸移層(10YR4/3)である。

2層は黄褐色のソフトローム層(10YR4/6)である。上部の色調は黄褐色で、ハードロームに貫入する部位では同ブロックを含み、色調も暗褐色がかっている。

3層以下はハードロームである。3層は褐色ローム(10YR4/4)である。径0.5mm以下の微小な白色粒子を含む。径0.5mm程度の燈色スコリアをわずかに含む。

4層は褐色～暗褐色ローム(10YR4/3)である。5層より色調は明るく、部分的にソフトローム、褐色のロームが混在する。下部にやや多く径0.5mm程度の燈色スコリアを含む。黒色のスコリアをわずかに含む。

5層は暗褐色ローム(10YR2/2)である。黒色帯に相当する。上部を中心に燈色のスコリアを含む。黒色スコリアをわずかに含む。

6層は黄褐色ローム(10YR6/8)である。燈色、黒色スコリアをわずかに含む。7層(10YR5/8)は暗褐色ロームである。

遺物の出土層位は2層である。

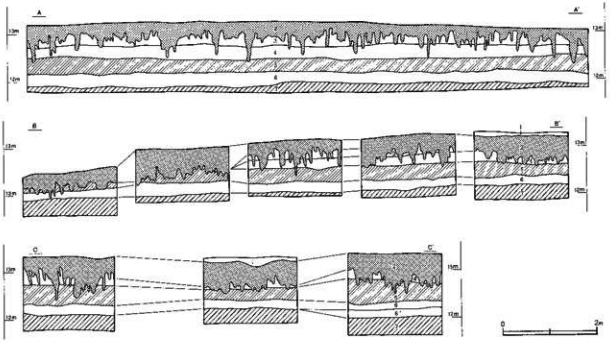
（3）石器集中

石器集中1（第8図）

C3・4、D3・4グリッドに位置する。南北6m、東西10mの範囲に比較的密に分布している。グリッド表示杭付近が分布の中心になっている。

遺物の垂直位置は標高13.1m～13.2mに分布し、全体の分布はほぼ水平である。

第6図　土層断面図

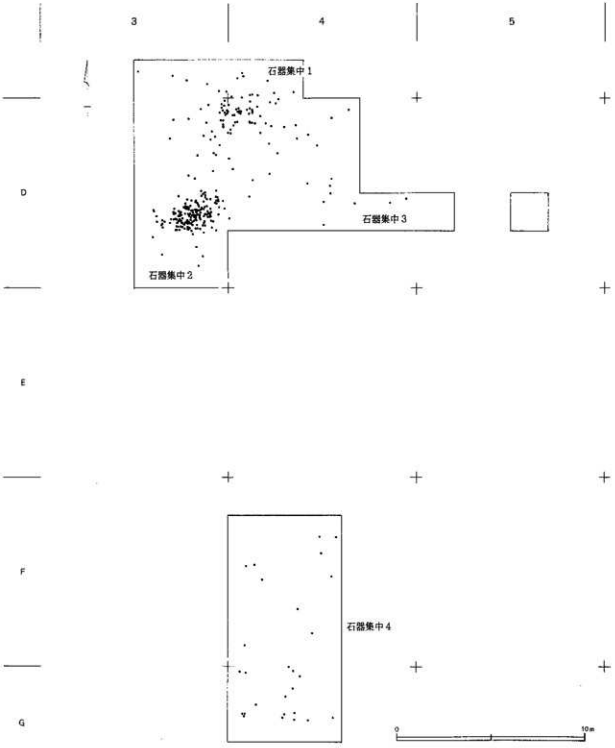


総数93点が出土しており、黒曜石87点、チャート6点である。

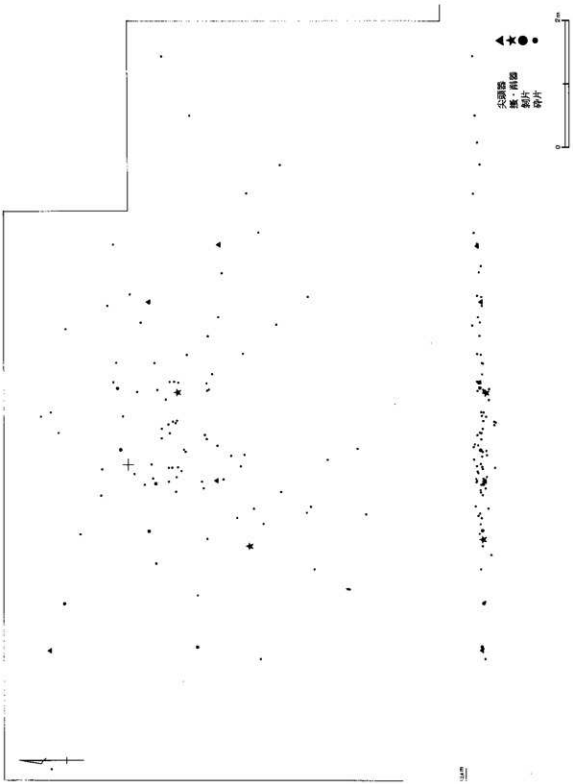
石器の内訳は尖頭器4点、掻・削器2点、剥片6点、砕片81点である。

尖頭器、掻・削器、剥片は黒曜石である。砕片のうち、黒曜石は75点、チャートは6点である。出土した総数のうち8割が黒曜石の砕片であり、微小なものが多い。

第7図　遺物分布図



第8図　石器集中Ⅰ



石器集中２（第９図）

石器集中１の南側、Ｄ３・４グリッドに位置する。

直径３ｍの円内に密度の高い中心的な分布があり、その周縁にはまばらに分布している。

遺物の垂直位置はほぼ13.1m～13.2m に分布している。

全体として垂直分布はレンズ状をなしており、ほぼ水平である。

総数171点が出土している。内訳はナイフ形石器２点、尖頭器１点、掻・削器１点、剥片７点、砕片160点である。

ナイフ形石器、尖頭器、掻・削器の tool は分布の西側に偏っている。

石材はナイフ形石器のうち１点がチャートで、これ以外の170点は黒曜石である。総数の９割以上が黒曜石の砕片である。微小なものが多い。

石器集中３（第10図）

Ｄ４グリッドに位置する。石器の数は少なく、散漫な分布である。

総数は９点で内訳は剥片１点、砕片８点である。石材は黒曜石が６点、チャートが２点である。

石器集中４（第11図）

Ｆ・Ｇ４グリッドに位置する。石器集中１～３とは約20m 南に離れた位置にある。

南北10m、東西６ｍの範囲に分布する。分布の中心はなく、比較的散漫な分布を示している。

遺物の垂直位置は標高12.9m から13.4m の範囲に分布している。全体の分布は南側にきわめて緩やかに傾いている。

総数29点が出土している。内訳はナイフ形石器１点、尖頭器２点、石核１点、剥片３点、砕片22点である。

石材は総数29点のうち黒曜石が25点、チャートが４点である。ナイフ形石器、剥片の各１点、砕片の２点がチャートである。

チャート製のナイフ形石器についてはこれ以外の石器と比べ古い様相を示しているが、垂直分布では区別し得なかった（第11図）。

単独

Ｅ５グリッドから遺構確認時に黒曜石製のナイフ形石器１点（第13図８）が出土した。

（４）出土石器

本遺跡から出土した石器総数は212点である。

第12図２～５・８は石器集中１、第12図１・６・７・９・10は石器集中２、第12図11は石器集中３、第13図１～７は石器集中４、第13図８は単独出土である。

第12図１は尖頭器である。柳葉形である。正面は上方向からの剥離に続き、反対方向からの剥離が行われている。両側縁中央部に原石面を残している。先端部・基部を中心に整形剥離が行われている。主要剥離面は加工が行われていない。石材は黒曜石である。

第12図２は尖頭器である。先端部を若干欠損している。左右非対称形である。周縁部は比較的粗い剥離が行われた後、緻密な剥離が行われている。主要剥離面は、打留痕によって張り出している。石材は透明な黒曜石である。

第12図３は尖頭器である。先端部は両側縁からの整形剥離によって尖っている。基部は裏面の剥離により整形されている。石材は黒曜石である。

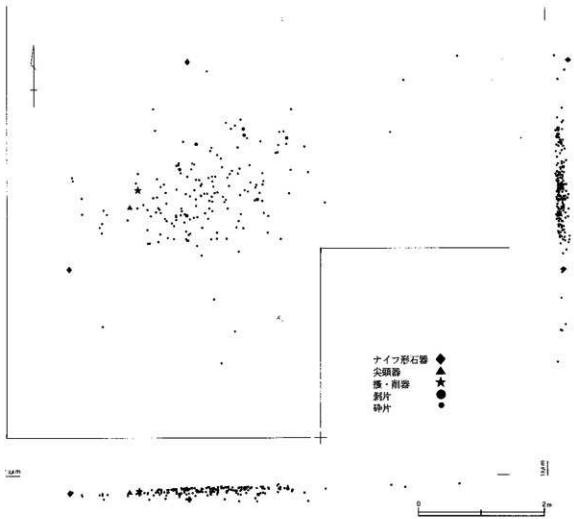
第12図４は尖頭器である。裏面には平坦剥離が行われている。正面は裏面同様に周縁部から整形剥離が行われているが、右下端部の剥離によって、現存の長径になっている。石材は黒曜石ではあるが、ほかの黒曜石とは違い、黒色に茶色が縞状に混じるものである。

第12図５は尖頭器である。ほかの尖頭器と違い先端部が尖っていない。整形は両面周縁部の細かい剥離によって行われている。石材は黒曜石である。

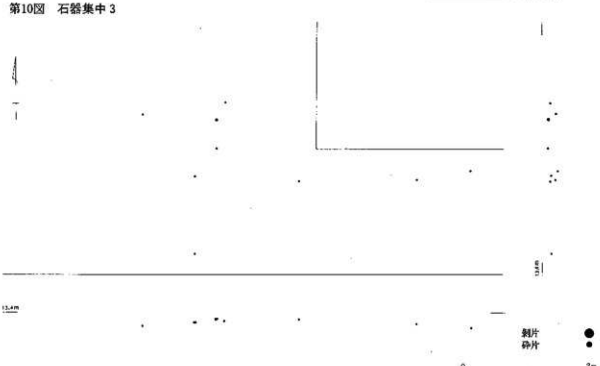
第12図６はナイフ形石器である。先端・基部は大きく欠損している。縦長剥片を使用している。刃部は左刃である。基部には緻密な剥離が行われている。石材は非常に透明度の高い黒曜石である。

第12図７はナイフ形石器である。本遺跡で最も小形である。打面を残した横長剥片を使用している。刃部は右刃である。背縁上部は切断した後、側縁部からの微細な刃つぶしの剥離が行われている。石材は乳白

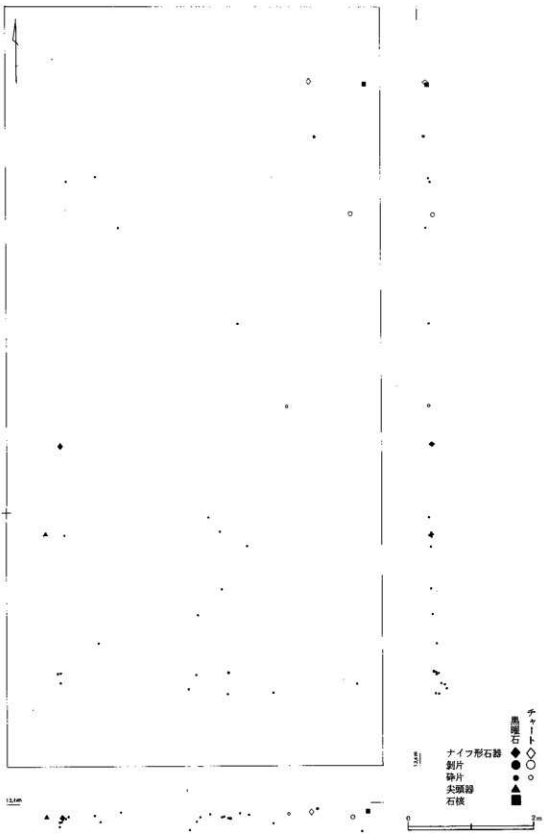
第９図　石器集中２



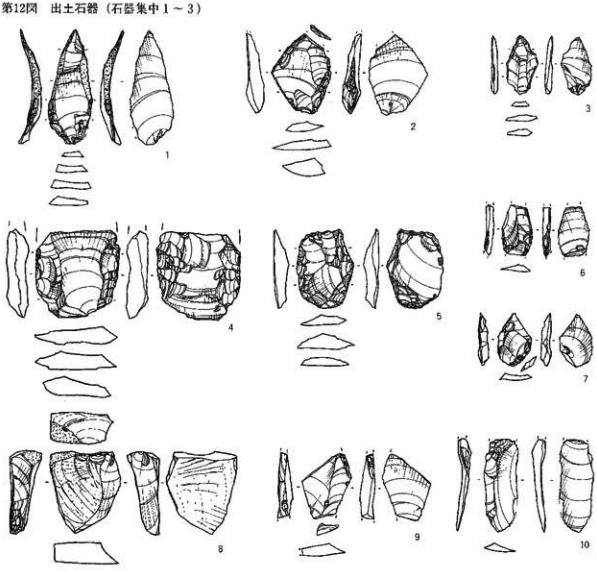
第10図　石器集中３



第11図　石器集中 4



第12図　出土石器（石器集中１～３）



色のチャートである。

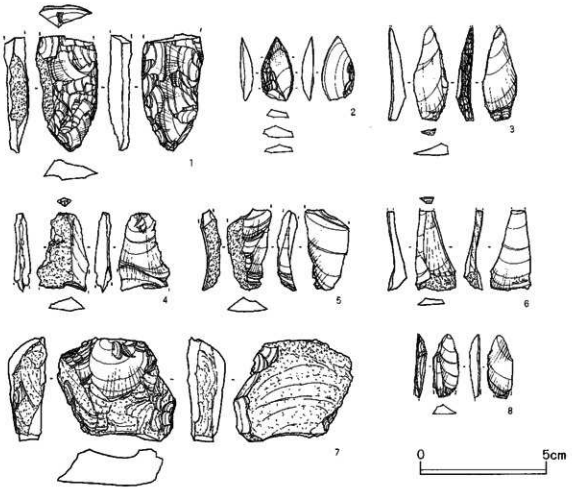
第12図８は掻・削器である。原石面を大きく残している。刃部は大きく剥離した後、同方向からの緻密な剥離により製作されている。石材は非常に透明度の高い黒曜石である。

第12図９は刃部の様子から、掻・削器と思われる。欠損により、大きさは解らない。刃部は粗い剥離が行われた後、微細な剥離が行われている。石材は黒曜石である。

第12図10は剥片である。打面は折断によって欠損している。非常に薄い縦長剥片である。石材は淡黒色で非常に透明度の高い黒曜石である。

第12図11は剥片である。打面は残っている。石材は透明度の高い黒曜石である。

第13図　出土石器（石器集中４・単独）



第13図１は尖頭器である。先端部を大きく欠損している。折断面・側縁部の状況から、未成品と思われる。左側縁部に原石面が残っている。正面は左基部及び右側縁と偏った方向から剥離が行われている。裏面には平坦剥離が行われ、凸レンズ状である。石材は黒曜石である。

第13図２は尖頭器である。第13図１の尖頭器と対照的に非常に小形である。横長剥片を使用している。正面は、左側縁部からの剥離の後、両側縁部に緻密な急角度の剥離が行われている。そのため、外形が少々鋸歯状を呈する。裏面は打瘤痕の除去を目的とする剥離が行われている。石材は非常に透明度の高い黒曜石である。

第13図３はナイフ形石器である。先端を若干欠損している。やや右に傾く上位方向からの縦長剥片を使用している。刃部は左刃である。背縁は、先端から基端まで比較的粗い急角度の剥離を行った後、背縁中央部分に微細な剥離が行われている。石材はチョコレート色のチャートである。

第13図４・５は剥片である。石材は黒曜石である。

第13図６は剥片である。石材はチョコレート色のチャートである。第13図３と同一母岩と思われる。

第13図７は石核である。原石面を大きく残している。作業面は正面に限定されている。石材は黒曜石である。

第13図８はナイフ形石器である。やや左に傾く上位方向からの縦長剥片を使用している。刃部は右刃である。左側縁は折断によって急角度な背縁が形成されている。先端部は折断面を正面から剥離することで尖らせている。石材は黒曜石である。

第２表　出土石器一覧

番号	グリッド	北－南(cm)	西－東(cm)	標高(m)	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質	石器集中	図版	備考
1	C3	923	890	13.17	砕片	0.65	0.42	0.04	0.03	黒曜石	1		
2	C3	958	993	13.12	砕片	0.78	0.58	0.10	0.05	黒曜石	1		
3	C3	956	952	13.12	砕片	0.90	0.34	0.10	0.04	黒曜石	1		
6	C3	102	780	13.10	剥片	2.12	2.85	0.76	2.75	黒曜石	1		
7	C3	127	706	13.12	尖頭器	3.49	3.61	0.74	10.86	黒曜石	1	第12図4	
9	C3	125	518	13.00	砕片	1.14	0.81	0.11	0.08	黒曜石	1		
3	C4	967	250	13.13	砕片	0.80	1.09	0.07	0.06	黒曜石	1		
4	C4	982	160	13.13	砕片	0.81	0.91	0.29	0.16	黒曜石	1		
5	C4	977	130	13.18	砕片	0.51	0.51	0.06	0.02	黒曜石	1		
6	C4	982	120	13.15	剥片	1.66	2.47	0.19	0.70	黒曜石	1		
7	C4	875	82	13.12	砕片	0.69	1.06	0.12	0.06	黒曜石	1		
8	C4	888	50	13.14	砕片	0.88	1.37	0.14	0.09	黒曜石	1		
9	C4	992	76	13.12	砕片	0.66	0.22	0.05	0.04	黒曜石	1		
10	C4	988	23	13.16	剥片	1.01	1.92	0.39	0.56	黒曜石	1		
11	C4	140	75	13.07	砕片	0.78	0.91	0.11	0.04	黒曜石	1		
12	C4	100	213	13.14	砕片	0.38	0.25	0.05	0.01	黒曜石	1		
14	C4	33	348	13.20	砕片	0.48	0.56	0.06	0.03	黒曜石	1		
1	D3	110	711	13.12	剥片	1.52	1.12	0.31	0.43	黒曜石	1		
2	D3	212	692	13.08	砕片	1.64	0.95	0.26	0.31	黒曜石	1		
4	D3	635	852	13.22	砕片	0.75	0.25	0.03	0.02	黒曜石	2		
6	D3	618	793	13.21	砕片	0.75	0.50	0.07	0.05	黒曜石	2		
7	D3	678	790	13.19	砕片	1.29	0.59	0.06	0.06	黒曜石	2		
8	D3	635	742	13.19	砕片	1.58	0.58	0.11	0.09	黒曜石	2		
9	D3	734	600	13.12	ナイフ形石器	2.00	1.19	0.30	0.76	黒曜石	2	第12図6	
10	D3	180	997	13.21	砕片	1.51	0.72	0.12	0.19	黒曜石	1		
11	D3	152	977	13.22	砕片	0.52	0.42	0.07	0.02	黒曜石	1		
12	D3	118	973	13.21	砕片	1.02	0.93	0.09	0.06	黒曜石	1		
13	D3	85	989	13.20	砕片	0.94	0.48	0.06	0.04	黒曜石	1		
14	D3	76	956	13.13	砕片	1.29	1.29	0.23	0.38	黒曜石	1		
15	D3	64	973	13.21	砕片	0.40	0.31	0.02	0.01	黒曜石	1		
16	D3	26	968	13.15	砕片	1.52	1.24	0.15	0.24	黒曜石	1		
17	D3	9	986	13.19	砕片	1.42	1.14	0.08	0.15	黒曜石	1		
18	D3	32	894	13.12	剥片	1.97	0.86	0.37	0.49	黒曜石	1		
19	D3	50	856	12.98	砕片	0.78	0.52	0.07	0.04	黒曜石	1		
20	D3	38	978	13.10	砕片	0.99	0.57	0.08	0.05	黒曜石	1		
21	D3	45	969	13.10	剥片	1.98	0.97	0.37	0.37	黒曜石	1		
22	D3	65	995	13.12	砕片	0.81	1.14	0.09	0.08	黒曜石	1		
23	D3	79	995	13.12	砕片	0.98	0.66	0.22	0.07	黒曜石	1		
24	D3	77	980	13.05	砕片	1.22	1.14	0.21	0.26	黒曜石	1		
25	D3	118	962	13.06	砕片	0.65	0.98	0.05	0.03	黒曜石	1		
26	D3	142	974	13.07	尖頭器	2.28	1.25	0.33	0.83	黒曜石	1	第12図3	
27	D3	110	792	13.09	砕片	0.73	0.49	0.22	0.06	黒曜石	1		
28	D3	126	882	13.07	砕片	0.70	0.79	0.17	0.04	黒曜石	1		
29	D3	174	915	13.14	砕片	0.79	0.63	0.20	0.10	黒曜石	1		
30	D3	193	870	13.11	掻・削器	2.55	3.15	0.74	4.71	黒曜石	1		
31	D3	585	935	13.23	砕片	0.24	0.15	0.02	0.01	黒曜石	2		
32	D3	655	870	13.22	砕片	0.95	0.45	0.12	0.06	黒曜石	2		
33	D3	882	842	13.22	砕片	0.63	0.23	0.05	0.02	黒曜石	2		
34	D3	520	880	13.19	剥片	1.39	1.92	0.14	0.43	黒曜石	2		
35	D3	510	859	13.21	砕片	0.85	1.02	0.10	0.10	黒曜石	2		
36	D3	70	995	12.92	砕片	1.05	0.79	0.10	0.08	黒曜石	1		

番号	グリッド	北－南(cm)	西－東(cm)	標高(m)	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質	石器集中	図版	備考
37	D3	201	930	13.02	砕片	1.18	0.91	0.09	0.13	チャート	1		
38	D3	538	947	13.23	砕片	1.54	2.08	0.20	0.45	黒曜石	2		
39	D3	548	930	13.23	砕片	0.48	0.86	0.07	0.04	黒曜石	2		
41	D3	580	908	13.21	砕片	1.06	0.49	0.10	0.06	黒曜石	2		
42	D3	568	888	13.20	砕片	0.88	1.06	0.09	0.09	黒曜石	2		
43	D3	557	842	13.22	砕片	0.61	0.41	0.03	0.01	黒曜石	2		
44	D3	530	782	13.17	砕片	0.49	0.13	0.01	0.01	黒曜石	2		
46	D3	585	829	13.21	砕片	0.30	0.25	0.06	0.01	黒曜石	2		
47	D3	588	822	13.22	砕片	0.38	0.21	0.02	0.01	黒曜石	2		
48	D3	590	802	13.21	砕片	0.59	0.28	0.14	0.01	黒曜石	2		
49	D3	597	811	13.20	砕片	0.31	0.17	0.02	0.01	黒曜石	2		
50	D3	606	799	13.21	砕片	0.25	0.12	0.01	0.01	黒曜石	2		
51	D3	613	820	13.22	砕片	0.57	0.24	0.07	0.01	黒曜石	2		
52	D3	632	802	13.21	砕片	0.25	0.31	0.04	0.01	黒曜石	2		
53	D3	651	796	13.21	砕片	0.47	0.28	0.02	0.01	黒曜石	2		
54	D3	678	794	13.20	砕片	0.27	0.20	0.02	0.01	黒曜石	2		
55	D3	643	817	13.21	砕片	0.55	0.64	0.11	0.05	黒曜石	2		
56	D3	625	848	13.22	砕片	0.21	0.41	0.01	0.01	黒曜石	2		
57	D3	600	854	13.20	砕片	0.51	0.02	0.03	0.01	黒曜石	2		
58	D3	614	874	13.21	砕片	0.67	0.27	0.04	0.01	黒曜石	2		
59	D3	609	884	13.22	砕片	0.72	0.35	0.03	0.02	黒曜石	2		
60	D3	602	897	13.21	砕片	1.10	1.01	0.14	0.18	黒曜石	2		
61	D3	594	890	13.22	砕片	0.43	0.37	0.03	0.01	黒曜石	2		
62	D3	621	908	13.23	砕片	1.93	1.83	0.20	0.46	黒曜石	2		
63	D3	612	950	13.20	砕片	1.47	1.16	0.12	0.23	黒曜石	2		
64	D3	648	917	13.22	砕片	0.52	0.72	0.08	0.03	黒曜石	2		
66	D3	675	916	13.20	砕片	1.79	1.29	0.33	0.58	黒曜石	2		
68	D3	479	954	13.15	砕片	0.52	0.32	0.02	0.01	黒曜石	2		
69	D3	381	919	13.18	砕片	0.38	0.34	0.04	0.01	黒曜石	1		
70	D3	592	605	13.14	砕片	1.47	0.66	0.07	0.17	黒曜石	2		
71	D3	588	604	13.14	砕片	0.71	0.42	0.07	0.03	黒曜石	2		
72	D3	646	620	13.08	砕片	1.34	0.76	0.14	0.13	黒曜石	2		
73	D3	620	620	13.09	砕片	0.65	0.40	0.05	0.02	黒曜石	2		
74	D3	666	648	13.11	砕片	0.25	0.49	0.05	0.01	黒曜石	2		
75	D3	660	652	13.13	砕片	0.65	0.75	0.08	0.06	黒曜石	2		
76	D3	646	660	13.09	砕片	0.46	0.55	0.07	0.02	黒曜石	2		
77	D3	635	696	13.14	尖頭器	4.49	1.69	0.42	2.93	黒曜石	2	第12図1	
79	D3	596	706	13.12	砕片	0.72	0.15	0.07	0.01	黒曜石	2		
80	D3	606	710	13.17	掻・削器	2.72	1.82	0.48	2.24	黒曜石	2	第12図9	
81	D3	630	718	13.13	砕片	0.75	0.89	0.10	0.07	黒曜石	2		
82	D3	638	724	13.14	砕片	0.62	0.64	0.04	0.02	黒曜石	2		
83	D3	649	730	13.18	砕片	0.98	1.25	0.15	0.17	黒曜石	2		
84	D3	619	740	13.17	砕片	0.25	0.32	0.02	0.01	黒曜石	2		
85	D3	638	743	13.19	砕片	0.47	0.30	0.04	0.01	黒曜石	2		
86	D3	644	746	13.16	砕片	0.50	0.27	0.04	0.01	黒曜石	2		
87	D3	677	745	13.18	砕片	0.42	0.22	0.02	0.01	黒曜石	2		
88	D3	682	757	13.18	砕片	0.59	0.29	0.02	0.01	黒曜石	2		
89	D3	684	766	13.18	砕片	0.36	0.23	0.02	0.01	黒曜石	2		
90	D3	663	767	13.20	砕片	0.27	0.32	0.02	0.01	黒曜石	2		
91	D3	650	770	13.20	砕片	0.58	0.54	0.03	0.02	黒曜石	2		
92	D3	648	787	13.20	剥片	2.86	1.32	0.47	1.29	黒曜石	2		

番号	グリッド	北－南(cm)	西－東(cm)	標高(m)	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質	石器集中	図版	備考
93	D3	654	792	13.20	砕片	1.57	0.78	0.31	0.29	黒曜石	2		
94	D3	672	786	13.12	砕片	0.54	0.74	0.05	0.03	黒曜石	2		
96	D3	650	804	13.16	砕片	0.89	0.65	0.06	0.03	黒曜石	2		
97	D3	666	812	13.15	砕片	0.56	0.46	0.03	0.02	黒曜石	2		
98	D3	695	804	13.16	砕片	0.99	0.68	0.09	0.08	黒曜石	2		
99	D3	674	836	13.14	砕片	1.18	0.59	0.10	0.08	黒曜石	2		
100	D3	684	850	13.15	砕片	0.77	0.44	0.05	0.01	黒曜石	2		
101	D3	635	824	13.19	砕片	0.29	0.57	0.02	0.01	黒曜石	2		
102	D3	664	866	13.17	砕片	0.30	0.46	0.03	0.01	黒曜石	2		
103	D3	667	878	13.18	砕片	0.76	0.48	0.29	0.10	黒曜石	2		
104	D3	646	874	13.17	砕片	0.40	0.39	0.03	0.01	黒曜石	2		
105	D3	622	850	13.22	砕片	0.54	0.55	0.05	0.01	黒曜石	2		
106	D3	612	836	13.21	砕片	0.18	0.10	0.02	0.01	黒曜石	2		
107	D3	593	829	13.20	砕片	1.63	1.45	0.48	0.66	黒曜石	2		
108	D3	600	810	13.18	砕片	0.48	0.15	0.02	0.01	黒曜石	2		
109	D3	586	788	13.18	砕片	0.31	0.28	0.03	0.01	黒曜石	2		
111	D3	514	737	13.14	砕片	0.37	0.21	0.04	0.01	黒曜石	2		
112	D3	534	803	13.17	剥片	2.37	1.25	0.18	0.60	黒曜石	2		
113	D3	540	827	13.19	砕片	0.72	1.03	0.13	0.10	黒曜石	2		
114	D3	552	836	13.17	砕片	0.26	0.19	0.01	0.01	黒曜石	2		
115	D3	586	833	13.19	砕片	1.30	0.49	0.04	0.05	黒曜石	2		
116	D3	570	844	13.21	砕片	0.63	0.85	0.12	0.07	黒曜石	2		
117	D3	582	857	13.18	砕片	0.93	0.92	0.09	0.11	黒曜石	2		
118	D3	580	870	13.22	砕片	0.50	0.41	0.10	0.02	黒曜石	2		
119	D3	612	904	13.23	砕片	1.02	1.50	0.07	0.09	黒曜石	2		
120	D3	594	910	13.20	砕片	0.72	1.02	0.56	0.52	黒曜石	2		
121	D3	526	885	13.18	砕片	0.55	0.35	0.06	0.01	黒曜石	2		
122	D3	510	878	13.19	剥片	3.58	1.41	0.55	1.51	黒曜石	2	第12図10	
123	D3	536	934	13.18	砕片	1.19	0.70	0.54	0.28	黒曜石	2		
124	D3	515	935	13.19	砕片	0.98	0.66	0.19	0.09	黒曜石	2		
125	D3	525	947	13.20	剥片	2.89	1.46	1.14	4.23	黒曜石	2		
126	D3	514	942	13.20	砕片	0.95	0.78	0.06	0.05	黒曜石	2		
127	D3	500	850	13.12	砕片	0.66	0.60	0.03	0.03	黒曜石	2		
128	D3	503	865	13.14	砕片	0.73	0.39	0.04	0.02	黒曜石	2		
130	D3	496	874	13.21	砕片	0.71	0.56	0.21	0.09	黒曜石	2		
132	D3	574	795	13.14	砕片	0.34	0.28	0.04	0.01	黒曜石	2		
133	D3	547	932	13.15	砕片	0.96	0.50	0.07	0.04	黒曜石	2		
134	D3	606	880	13.13	砕片	0.39	0.32	0.09	0.01	黒曜石	2		
135	D3	576	860	13.17	砕片	0.87	0.49	0.05	0.02	黒曜石	2		
136	D3	586	852	13.17	砕片	0.98	0.50	0.22	0.06	黒曜石	2		
137	D3	600	830	13.17	砕片	0.29	0.17	0.01	0.01	黒曜石	2		
138	D3	612	832	13.19	砕片	0.83	0.56	0.13	0.06	黒曜石	2		
139	D3	624	828	13.19	砕片	0.71	0.13	0.10	0.01	黒曜石	2		
141	D3	640	828	13.16	砕片	0.42	0.32	0.03	0.01	黒曜石	2		
142	D3	624	824	13.17	砕片	0.93	0.59	0.14	0.11	黒曜石	2		
143	D3	617	827	13.20	砕片	0.47	0.36	0.02	0.01	黒曜石	2		
144	D3	590	807	13.15	砕片	0.25	0.50	0.01	0.01	黒曜石	2		
145	D3	566	800	13.09	砕片	0.66	0.25	0.02	0.01	黒曜石	2		
146	D3	565	774	13.14	砕片	0.56	0.46	0.07	0.02	黒曜石	2		
147	D3	568	770	13.15	砕片	0.51	0.23	0.11	0.01	黒曜石	2		
148	D3	617	810	13.19	砕片	0.80	1.27	0.15	0.15	黒曜石	2		

番号	グリッド	北－南(cm)	西－東(cm)	標高(m)	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質	石器集中	図版	備考
149	D3	612	786	13.18	砕片	0.31	0.15	0.03	0.01	黒曜石	2		
151	D3	606	770	13.12	砕片	0.92	0.61	0.09	0.03	黒曜石	2		
152	D3	645	784	13.19	砕片	0.68	0.57	0.04	0.01	黒曜石	2		
153	D3	658	783	13.16	砕片	0.50	0.70	0.08	0.02	黒曜石	2		
154	D3	654	770	13.18	砕片	0.75	0.57	0.09	0.03	黒曜石	2		
155	D3	659	763	13.19	砕片	0.59	0.51	0.04	0.01	黒曜石	2		
156	D3	648	770	13.19	砕片	0.31	0.39	0.02	0.01	黒曜石	2		
157	D3	645	778	13.20	砕片	0.70	0.41	0.09	0.06	黒曜石	2		
158	D3	640	780	13.20	砕片	0.72	0.63	0.05	0.03	黒曜石	2		
159	D3	637	779	13.20	砕片	1.35	1.07	0.35	0.31	黒曜石	2		
160	D3	655	756	13.17	砕片	0.52	0.38	0.06	0.01	黒曜石	2		
161	D3	628	756	13.13	砕片	0.63	0.75	0.08	0.05	黒曜石	2		
162	D3	642	738	13.14	砕片	0.24	0.20	0.02	0.01	黒曜石	2		
163	D3	601	745	13.13	砕片	2.02	1.24	0.27	0.67	黒曜石	2		
164	D3	589	741	13.14	砕片	0.27	0.33	0.02	0.01	黒曜石	2		
166	D3	419	820	13.10	砕片	0.99	1.26	0.09	0.13	黒曜石	2		
167	D3	293	934	13.23	砕片	0.78	0.96	0.04	0.04	黒曜石	1		
168	D3	582	710	13.11	砕片	0.26	0.49	0.04	0.01	黒曜石	2		
169	D3	684	835	13.12	砕片	1.11	0.63	0.09	0.07	黒曜石	2		
170	D3	597	750	13.14	砕片	1.15	0.62	0.10	0.06	黒曜石	2		
171	D3	611	754	13.08	砕片	0.59	0.40	0.05	0.02	黒曜石	2		
172	D3	622	802	13.15	砕片	1.30	0.62	0.09	0.09	黒曜石	2		
173	D3	613	816	13.14	砕片	1.34	0.80	0.23	0.34	黒曜石	2		
174	D3	580	778	13.14	砕片	1.18	1.02	0.25	0.28	黒曜石	2		
175	D3	574	775	13.13	剥片	3.89	2.40	1.12	8.60	黒曜石	2		
176	D3	563	775	13.07	砕片	1.41	0.61	0.18	0.16	黒曜石	2		
177	D3	540	869	13.12	砕片	0.46	0.45	0.06	0.02	黒曜石	2		
178	D3	298	834	13.14	砕片	0.65	0.47	0.11	0.02	黒曜石	1		
179	D3	286	922	13.16	砕片	2.08	0.96	0.22	0.36	チャート	1		
181	D3	642	910	13.14	砕片	1.99	1.65	0.39	0.93	黒曜石	2		
182	D3	622	900	13.11	剥片	2.83	1.25	0.16	0.54	黒曜石	2		
183	D3	599	908	13.14	砕片	1.23	0.42	0.14	0.09	黒曜石	2		
184	D3	600	898	13.07	砕片	1.23	0.96	0.17	0.22	黒曜石	2		
185	D3	572	872	13.11	砕片	0.38	0.23	0.04	0.01	黒曜石	2		
186	D3	575	954	13.17	砕片	2.78	2.14	0.22	1.39	黒曜石	2		
187	D3	580	980	13.10	砕片	1.14	1.42	0.18	0.29	黒曜石	2		
188	D3	538	974	13.14	砕片	1.59	1.68	0.31	0.41	黒曜石	2		
189	D3	530	905	13.12	砕片	0.33	0.75	0.07	0.02	黒曜石	2		
190	D3	544	825	13.10	砕片	0.73	0.42	0.04	0.02	黒曜石	2		
191	D3	683	825	13.11	砕片	2.86	0.29	0.18	0.67	黒曜石	2		
192	D3	687	790	13.12	砕片	0.80	0.80	0.16	0.12	黒曜石	2		
193	D3	652	752	13.04	砕片	1.12	0.85	0.07	0.06	黒曜石	2		
194	D3	689	742	13.09	砕片	0.39	0.32	0.04	0.01	黒曜石	2		
195	D3	669	724	13.13	砕片	0.65	0.47	0.06	0.03	黒曜石	2		
196	D3	654	693	13.09	砕片	2.26	1.26	0.17	0.41	黒曜石	2		
197	D3	635	710	13.11	砕片	0.76	0.26	0.21	0.06	黒曜石	2		
198	D3	619	734	13.10	砕片	0.81	0.38	0.09	0.02	黒曜石	2		
199	D3	640	654	13.04	砕片	0.37	0.23	0.02	0.01	黒曜石	2		
200	D3	677	652	13.10	砕片	0.78	0.35	0.09	0.03	黒曜石	2		
203	D3	244	957	13.15	砕片	1.53	1.01	0.23	0.33	チャート	1		
205	D3	216	906	13.16	砕片	1.88	2.29	0.69	2.16	黒曜石	1		

番号	グリッド	北－南(cm)	西－東(cm)	標高(m)	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質	石器集中	図版	備考
207	D3	617	846	13.04	砕片	0.33	0.37	0.03	0.01	黒曜石	2		
208	D3	831	864	13.18	砕片	1.38	1.16	0.36	0.47	黒曜石	2		
209	D3	780	830	13.16	砕片	3.15	1.32	0.34	1.59	黒曜石	2		
210	D3	704	870	13.07	砕片	1.89	2.08	0.17	0.83	黒曜石	2		
211	D3	710	810	13.14	砕片	0.53	0.75	0.13	0.06	黒曜石	2		
212	D3	688	787	13.03	砕片	1.34	0.91	0.08	0.13	黒曜石	2		
213	D3	683	786	13.03	砕片	1.58	0.92	0.12	0.20	黒曜石	2		
214	D3	622	896	13.05	砕片	0.51	0.61	0.10	0.03	黒曜石	2		
215	D3	403	790	13.04	ナイフ形石器	2.10	1.35	0.38	1.13	チャート	2	第12図7	
216	D3	692	726	13.04	砕片	1.98	1.35	0.15	0.38	黒曜石	2		
217	D3	821	652	13.10	砕片	1.28	1.07	0.18	0.16	黒曜石	2		
1	D4	65	50	13.16	砕片	0.97	0.65	0.07	0.06	チャート	1		
2	D4	122	47	13.21	砕片	1.95	2.13	0.22	0.96	黒曜石	1		
3	D4	142	30	13.19	砕片	1.45	1.98	0.22	0.48	黒曜石	1		
4	D4	125	116	13.20	砕片	1.61	0.75	0.25	0.28	黒曜石	1		
5	D4	126	128	13.16	砕片	0.52	0.75	0.12	0.06	黒曜石	1		
6	D4	74	130	13.20	砕片	2.01	2.51	0.34	1.12	黒曜石	1		
7	D4	134	142	13.12	砕片	0.40	0.62	0.06	0.01	黒曜石	1		
8	D4	94	173	13.16	砕片	0.42	0.31	0.10	0.01	黒曜石	1		
9	D4	183	174	13.20	砕片	0.52	0.52	0.07	0.01	黒曜石	1		
10	D4	237	219	13.28	砕片	0.49	0.39	0.04	0.01	黒曜石	1		
11	D4	428	554	13.27	砕片	0.84	0.52	0.12	0.06	黒曜石	3		
12	D4	395	220	13.26	砕片	0.38	0.58	0.04	0.02	黒曜石	2		
13	D4	515	112	13.24	砕片	0.59	1.08	0.04	0.03	黒曜石	2		
14	D4	190	427	13.27	砕片	1.75	1.90	0.20	0.72	チャート	1		
15	D4	100	550	13.23	砕片	2.72	1.28	0.20	0.64	チャート	1		
19	D4	41	159	13.11	砕片	0.39	0.22	0.02	0.01	黒曜石	1		
21	D4	46	117	13.11	砕片	0.35	0.38	0.03	0.01	黒曜石	1		
22	D4	164	14	13.13	砕片	1.47	1.88	0.20	0.45	黒曜石	1		
23	D4	125	40	13.15	砕片	1.24	1.01	0.05	0.08	黒曜石	1		
24	D4	80	112	13.08	掻・削器	2.06	3.22	1.17	10.56	黒曜石	1	第12図8	
25	D4	128	118	13.08	砕片	1.24	1.33	0.20	0.34	黒曜石	1		
26	D4	66	130	13.17	砕片	0.50	0.31	0.02	0.01	黒曜石	1		
27	D4	60	128	13.19	砕片	0.60	0.72	0.04	0.03	黒曜石	1		
28	D4	146	346	13.23	尖頭器	3.02	2.25	0.67	4.45	黒曜石	1	第12図5	
29	D4	3	267	13.22	砕片	1.44	0.61	0.25	0.22	黒曜石	1		
30	D4	33	255	13.13	尖頭器	3.13	2.32	0.64	3.48	黒曜石	1	第12図2	
31	D4	20	224	13.16	砕片	0.62	0.28	0.09	0.02	黒曜石	1		
32	D4	127	202	13.17	砕片	0.96	1.28	0.25	0.30	黒曜石	1		
33	D4	14	115	13.10	砕片	1.32	0.85	0.23	0.22	黒曜石	1		
34	D4	59	102	13.09	砕片	0.85	0.77	0.09	0.05	黒曜石	1		
35	D4	54	42	13.10	砕片	1.07	1.07	0.21	0.22	黒曜石	1		
36	D4	54	56	13.12	砕片	1.04	0.63	0.09	0.07	黒曜石	1		
37	D4	36	1	13.14	砕片	0.91	0.95	0.08	0.07	黒曜石	1		
38	D4	78	69	13.10	砕片	2.14	0.80	0.15	0.21	黒曜石	1		
39	D4	92	20	13.11	砕片	1.17	0.59	0.09	0.07	黒曜石	1		
40	D4	183	15	13.05	砕片	0.77	0.35	0.06	0.02	黒曜石	1		
41	D4	318	8	13.26	砕片	0.92	0.45	0.15	0.08	黒曜石	1		
43	D4	63	63	12.93	砕片	0.83	0.69	0.09	0.07	黒曜石	1		
44	D4	70	68	12.93	砕片	1.94	1.81	0.31	0.99	黒曜石	1		
45	D4	90	22	13.05	砕片	1.34	0.02	0.15	0.23	黒曜石	1		

番号	グリッド	北－南(cm)	西－東(cm)	標高(m)	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質	石器集中	図版	備考
46	D4	367	27	13.27	砕片	0.41	0.31	0.07	0.01	黒曜石	1		
47	D4	500	541	12.98	砕片	0.64	0.42	0.12	0.05	黒曜石	3		
48	D4	455	540	12.98	剥片	1.87	1.52	0.62	2.40	黒曜石	3	第12図11	
49	D4	76	67	12.90	砕片	1.63	0.91	0.13	0.22	黒曜石	1		
50	D4	627	7	13.20	砕片	0.79	0.30	0.03	0.01	黒曜石	2		
51	D4	433	134	13.21	砕片	1.20	1.25	0.34	0.56	黒曜石	2		
53	D4	445	422	13.19	砕片	1.33	1.90	0.21	0.57	黒曜石	3		
56	D4	544	505	13.25	砕片	2.11	1.17	0.57	1.43	黒曜石	3		
58	D4	552	672	13.27	砕片	0.57	0.80	0.15	0.07	黒曜石	3		
60	D4	666	506	13.25	砕片	1.15	1.52	0.17	0.32	黒曜石	3		
61	D4	535	946	13.16	砕片	2.23	2.03	0.28	1.09	チャート	3		
62	D4	550	860	13.22	砕片	1.01	1.28	0.27	0.24	チャート	3		
67	D4	244	473	13.16	砕片	1.46	0.91	0.17	0.23	黒曜石	1		
69	D4	210	366	13.27	砕片	2.17	1.27	0.55	1.14	黒曜石	1		
70	D4	150	303	13.17	砕片	1.81	1.49	0.45	0.53	黒曜石	1		
71	D4	144	232	13.18	砕片	0.55	0.50	0.06	0.02	黒曜石	1		
73	D4	56	644	13.27	砕片	1.61	0.94	0.63	0.85	黒曜石	1		
74	D4	288	264	13.14	砕片	1.09	0.78	0.13	0.10	黒曜石	1		
1	F4	550	182	13.27	砕片	0.36	0.52	0.60	0.03	黒曜石	4		
3	F4	320	486	13.28	ナイフ形石器	3.65	1.35	0.50	2.27	チャート	4	第13図3	
4	F4	528	552	13.18	剥片	3.27	1.56	0.61	2.03	チャート	4	第13図6	
5	F4	405	496	13.31	剥片	2.96	2.04	0.61	3.16	黒曜石	4	第13図4	
6	F4	323	576	13.25	石核	3.89	4.81	1.29	26.55	黒曜石	4	第13図7	
7	F4	470	142	13.22	砕片	0.65	0.82	0.20	0.10	黒曜石	4		
8	F4	478	98	13.20	砕片	0.35	0.55	0.07	0.02	黒曜石	4		
9-1	F4	701	372	13.23	砕片	1.69	0.70	0.18	0.17	チャート	4		
9-2	F4	701	372	13.23	砕片	1.18	1.00	0.13	0.17	黒曜石	4		
11	F4	832	450	13.22	砕片	1.32	0.81	0.25	0.25	チャート	4		
13-1	F4	893	88	13.18	砕片	2.10	1.35	0.27	0.49	黒曜石	4		
13-2	F4	893	88	13.18	尖頭器	2.55	1.23	0.45	1.16	黒曜石	4	第13図2	
1	G4	35	63	13.20	尖頭器	4.60	2.37	0.91	10.82	黒曜石	4	第13図1	
2	G4	36	94	13.18	砕片	0.37	0.23	0.05	0.01	黒曜石	4		
3	G4	254	82	13.12	砕片	0.25	0.16	0.02	0.01	黒曜石	4		
4	G4	254	87	13.11	砕片	1.43	0.75	0.10	0.10	黒曜石	4		
5	G4	270	86	13.06	砕片	1.06	0.74	0.80	0.09	黒曜石	4		
6	G4	207	148	13.14	砕片	0.57	0.51	0.04	0.02	黒曜石	4		
7	G4	279	291	12.97	砕片	0.84	0.62	0.06	0.04	黒曜石	4		
8	G4	257	304	13.13	砕片	0.78	1.01	0.04	0.05	黒曜石	4		
9	G4	286	354	13.17	砕片	0.57	0.27	0.07	0.01	黒曜石	4		
10	G4	252	356	13.17	剥片	3.19	1.80	0.59	2.73	黒曜石	4	第13図5	
11	G4	287	426	13.09	剥片	1.55	1.59	0.20	0.57	黒曜石	4		
12	G4	162	308	13.17	砕片	0.54	0.31	0.06	0.02	黒曜石	4		
13	G4	122	346	13.19	砕片	0.41	0.32	0.04	0.01	黒曜石	4		
14	G4	32	343	13.19	砕片	1.96	0.55	0.21	0.09	黒曜石	4		
15	G4	55	386	13.21	砕片	0.65	0.65	0.04	0.03	黒曜石	4		
16	G4	9	324	13.22	砕片	0.63	0.97	0.05	0.03	黒曜石	4		
17	G4	273	567	12.95	砕片	1.26	0.91	0.08	0.14	黒曜石	4		
8	E5	875	974	13.33	ナイフ形石器	2.48	0.99	0.35	0.87	黒曜石	単独	第13図8	

2　縄文時代

縄文時代の遺構、遺物は後期前葉の所産が主体を占めており、調査区の南東部を中心に分布していた。遺構の精査時にはＨ・Ｉグリッドとその周辺を中心にして後期前葉の土器片が分布しており、精査を重ねて、２軒の住居跡を確認した。遺構の総数は住居跡２軒、土壙11基である。

遺構外からの出土遺物は早期から後期中葉の土器、石器が見つかっている。

（１）住居跡

第１号住居跡（第14図）

Ｈ・Ｉ７グリッドに位置する。柄鏡形の形態をしており、主体部はやや不整の円形である。

張り出し部を含めた住居跡の全長は7.5mで、主体部の径は5.8mである。主軸方向はＮ−37°−Ｅである。他の遺構との重複関係はなかった。

深度は0.1mときわめて浅く、覆土はローム・ブロックを多く含む、粘質の黄褐色土・暗黄褐色土であった。床面はやや軟弱で、堅固な部分はなかった。

張り出し部は長さ2.1m、先端の幅は1.2mである。

柱穴は21本が見つかった。柱穴の深度は総じて浅く、主柱を構成する柱穴が不明である。

炉跡は主軸の張り出し部寄りで見つかっている。形態は不整の楕円形であり、長径0.9m、短径0.8mである。深度は0.3mである。

第17図１の土器は炉跡の確認面直上において検出されている（第14図、図版４）。第17図２の土器は炉跡の西側、覆土中より見つかっている。

住居跡の時期は、出土遺物により縄文後期前葉に比定される。

第１号住居跡出土土器（第16図・第17図）

第16図１・２は深鉢形土器の胴部で沈線間に縄文を充填する。縄文はLRである。３・４は「く」の字状に内折する深鉢形土器の口縁部である。同一個体である。５は沈線間に列点を充填した深鉢形土器の胴部である。Ｊ字状の文様が施されている。括れ部直下の部位である。

６〜15は隆帯と隆帯に沿ってその両側に沈線を施す深鉢形土器である。６〜11、12と13、14と15がそれぞれ同一個体と思われる。

６〜11は胴部が張り、括れ部から上部は外反気味に立ち上がり、口縁部が「く」の字状に内折する土器である。隆帯の要所に点文を施す。６・７は口縁部である。突起部に円孔を施す。沈線と刺突が要所に施される。口縁部下は無文部の多い構成をとるが突起部下など要所にＪ字状の隆帯などを施している。９は括れ部付近、８・10・11は胴部の破片である。横位の区画が認められる破片はなかった。

12・13は胴部破片で隆帯の要所に点文を施す。14・15も胴部の破片である。

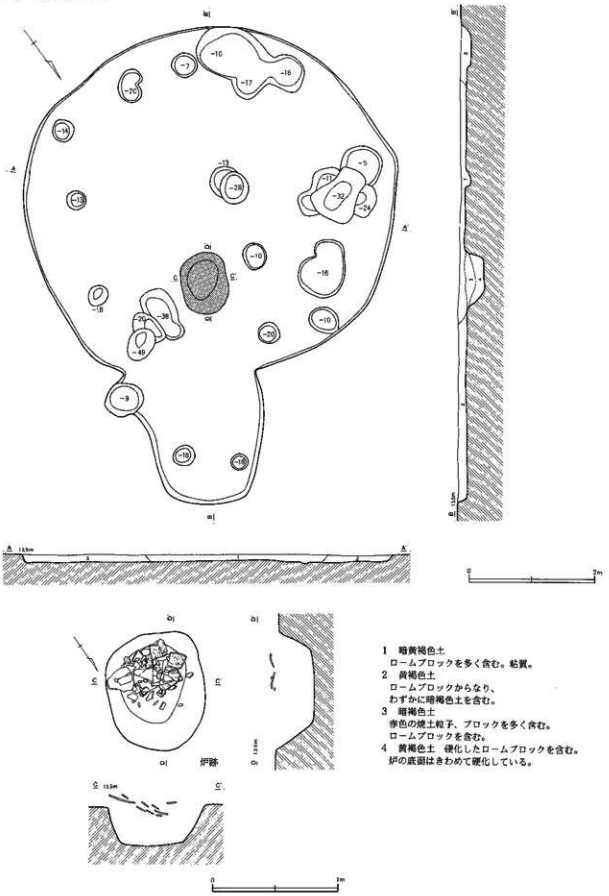
16は点文と沈線を口縁部に施す。17は２条一組の沈線を施す。18は横位と縦位の沈線を施す。描出はやや粗雑である。19は胴部下半の破片である。縦位の沈線が見られる。20は底部の破片である。

第17図１は平口縁の深鉢形土器である。中位で緩やかに括れている。底部を欠くがほぼ完形である。文様上部の横位の区画文は２条で施す原則を逸脱しており、１条の沈線によってなされている。主文様はスペード文と鉤状のモチーフが5回繰り返されており、上下２段の構成をとらず、胴部下半は縦位の沈線を垂下させている。沈線間には長さ1.5cm以下の短沈線的な列点を連続的に施す。

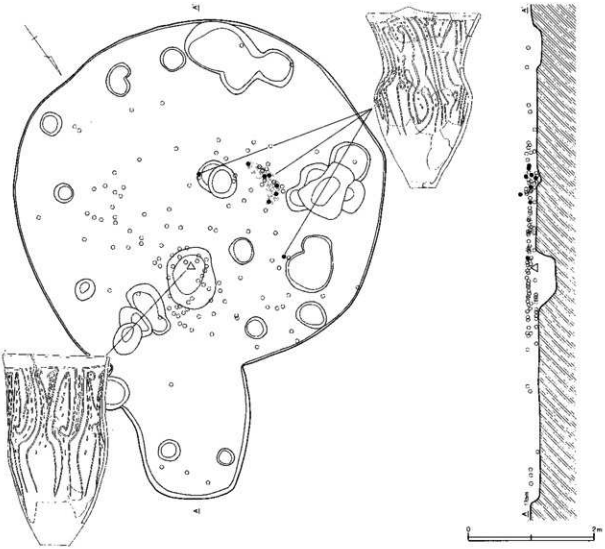
第17図２は波状の深鉢形土器である。波状部は剥落しており、推定である。胴部の括れはやや強い。１と同様に横位の一条沈線下に主文様を描く。欠損部位が多く、１／６以下の残存度である。器面の遺存状況は良くない。主文様はスペード状のモチーフが見られるが、括れ部から上のモチーフは推定である。沈線間には連続的な列点文が施される。

当住居跡の出土土器はいずれも後期前葉に位置づけられる。

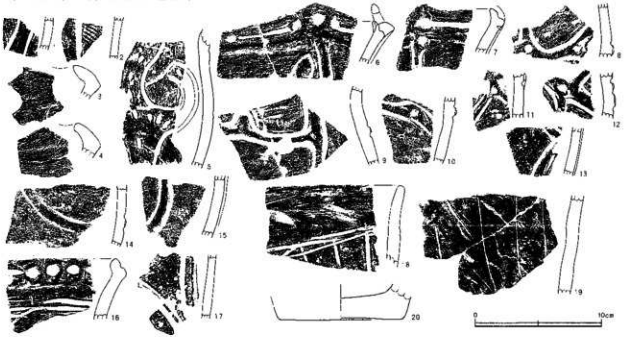
第14図　第1号住居跡


炉跡
1　暗黄褐色土
ロームブロックを多く含む。粘質。
2　黄褐色土
ロームブロックからなり、
わずかに暗褐色土を含む。
3　暗褐色土
赤色の焼土粒子、ブロックを多く含む。
ロームブロックを含む。
4　黄褐色土　硬化したロームブロックを含む。
炉の底面はきわめて硬化している。

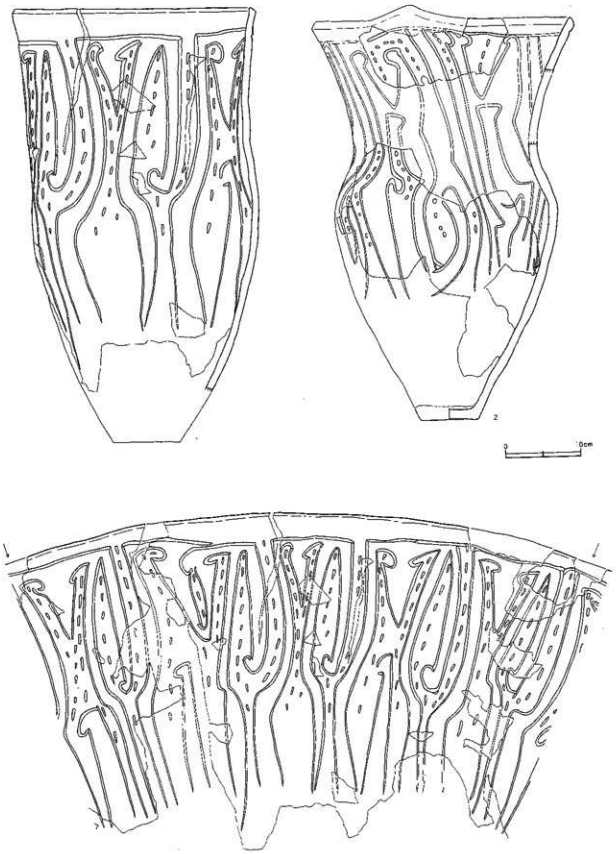
第15図　第Ⅰ号住居跡遺物分布図



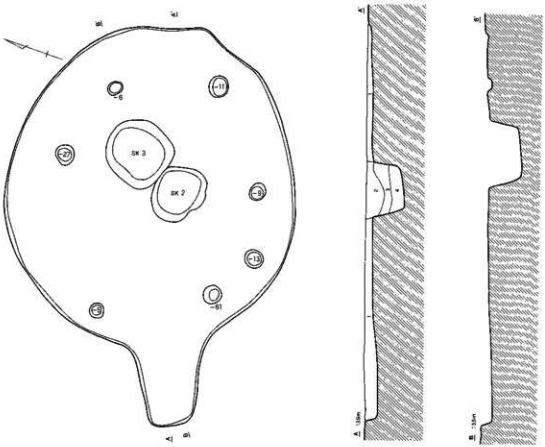
第16図　第Ⅰ号住居跡出土遺物(1)



第17図　第1号住居跡出土遺物(2)



第18図　第２号住居跡



第２号住居跡
1　暗黄褐色土　ローム粒子、ロームブロックを含む。

第２号土壙
2　暗褐色土　ロームブロックを少量含む。
3　黒褐色土　3～4 cm 程度の硬化したロームブロックを含む。
4　黄褐色土　ロームブロックをやや多く含む。

第２号住居跡（第18図）

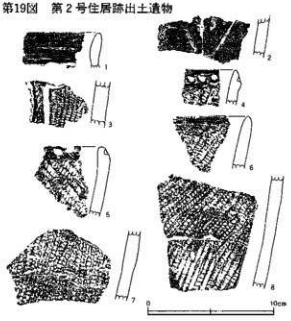
H７・８グリッドに位置する。長径×短径×深さは6.3×4.6×0.2mである。主軸方向はN―60°―Eである。第２・３号土壙に切られている。炉跡、周溝は確認されなかった。後期前葉の所産である。

第２号住居跡出土土器（第19図）

いずれも後期前葉の深鉢形土器である。

1、2は沈線文、3は地文縄文上に蕨手状の沈線文と磨消部を施す。4、5は口縁部に点列を施し、全面に縄文を施す土器である。6～8も全面に縄文を施す土器と思われる。3・4・6～8はLR、6はRLの横位施文である。

第19図　第２号住居跡出土遺物



（2）土壙

出土遺物はいずれも後期前葉のもので、遺構の時期も当期と考えられる。第９号～第11号土壙については図化しうる遺物がないが、これらも覆土の共通性などから当期の所産と考えられる。

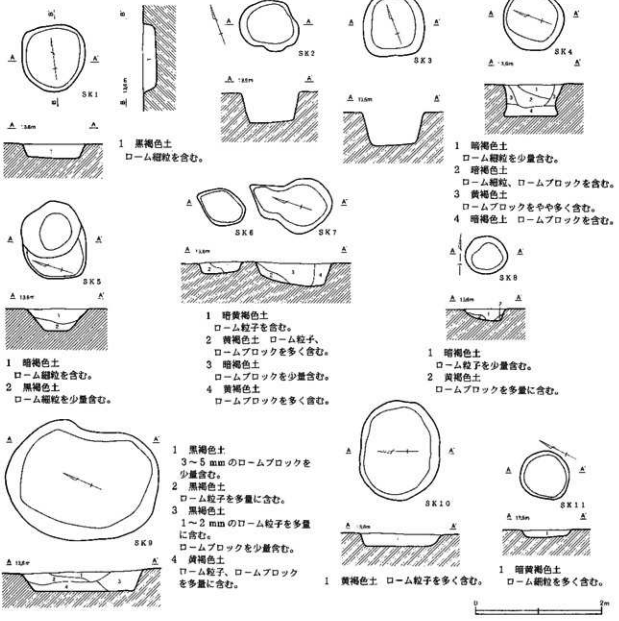
第１号土壙・同出土土器（第20図、第21図）

Ｇ９グリッドに位置する。平面形は不整の円形である。径1.0m、深さ0.2mである。壁面はほぼ垂直に立ち上がっている。底面は平坦である。

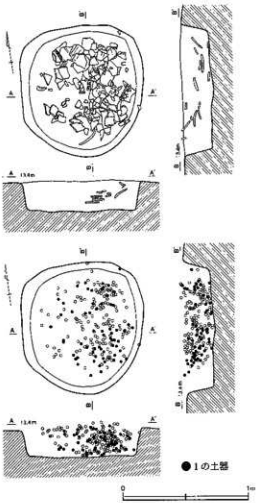
確認面および覆土から土器片多数が見つかった。東側にやや多く大型破片が出土している。これらは接合の結果、完形に近い２個体となった。(第21図１、２)。この２個体以外の破片は比較的少ない。

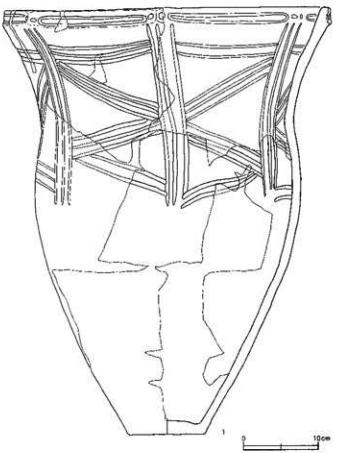
１と２の出土位置を同図にそれぞれ示した。平面的な出土位置の分布が大きく２つに分かれることはなく、２個体は破片が混在した状況で出土している。遺物は低面から浮いており、垂直に立っている破片はほとんどない。こうした諸点から２個体の埋葬が重複したもの、あるいは２個体を完形で埋めたものとは考えにくく、破損後、土壙内に埋められた可能性が高い。

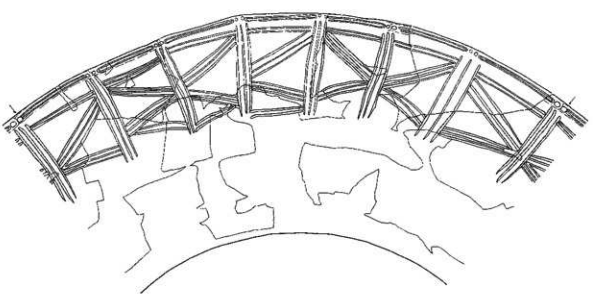
第20図　土壙

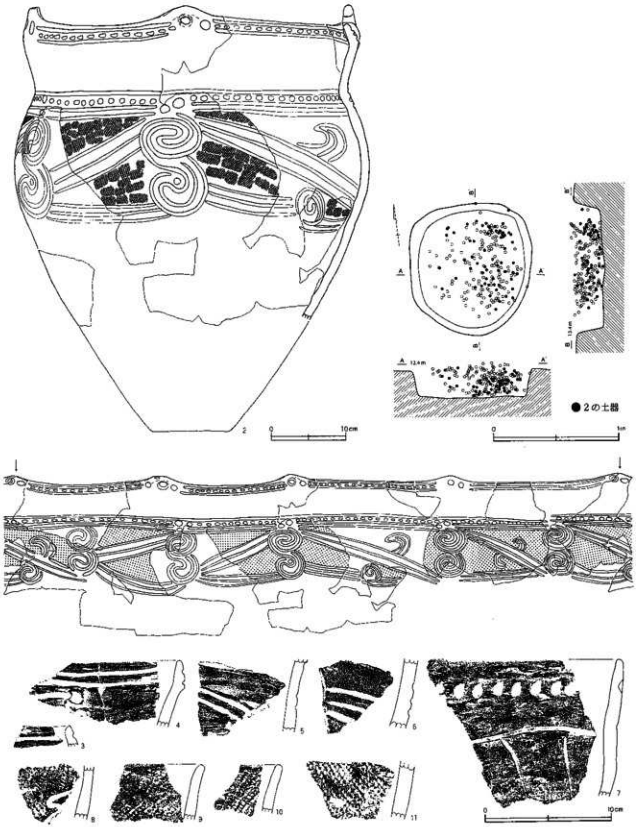


第21図　第1号土壙　出土状況・出土土器








2
0
10cm
●2の土器
0
1m
3
4
5
6
7
8
9
10
11
0
10cm

第21図１は胴部が緩く張り、口縁部が直立気味に立ち上がる形態の深鉢形土器である。口縁部には２条沈線を施す。対の点文を7箇所に配し、その下に３条一組の縦位の沈線文を施す。縦位の沈線間に横位、斜位の沈線文を施す。横位は２条、斜位は３条施すのが原則のようである。約３／４が残存。

２は胴部がやや強く張り、括れ部から口縁にかけて外傾し、口縁部が「く」の字状に内折する形態の深鉢形土器である。円孔、点文を施した突起を４単位に配す。上下に繋がる渦巻文を５箇所に施し、その間を３条１組の沈線文で連結する。括れ部と口縁部に沈線文、円文を巡らせる。胴部下半を欠く。約２／３が残存。

３～６は１と同類である。４は口縁部下に円形の貼付文を施す。５、６は胴部破片で同一個体である。７は口縁部に円文を巡らせ、体部に横位、縦位の沈線文を施す。８は地文上に沈線文、９～11は縄文のみが認められる。縄文は８～10がLR、11がRLである。

第2号土壙・同出土土器（第20図、第22図）

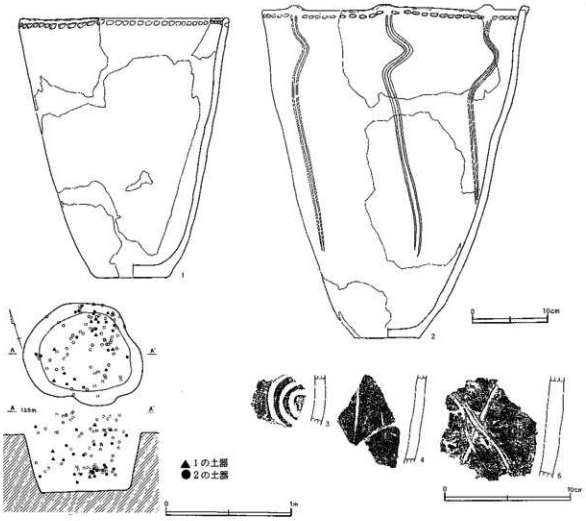
Ｈ８グリッドに位置する。第2号住居跡を切っている。平面形は不整形で、底面は平坦である。長径×短径×深さは0.9×0.8×0.5mである。

第22図１～５が出土土器である。

１、２は口縁部に刺突文を巡らせた深鉢形土器である。口縁部付近は横位に、体部から底部は縦位に磨かれている。１の体部は無文、２は２条１組の沈線文を垂下させる。１は約１／２、２は約１／３が残存。

３は渦巻文を施す。縄文はLR。４は縦位、５は交差する沈線文が認められる。

第22図　第２号土壙　出土状況・出土土器



第３号～第11号土壙（第20図）

第３号土壙はＨ８グリッドに位置する。第２号住居跡を切っている。平面形は不整円形で、底面は平坦である。径1.0m、深さ0.5mである。

第４号土壙はＪ８グリッドに位置する。他の土壙とはやや離れた位置にある。いわゆる袋状土壙に近い段面形である。平面形は不整円形で、底面は平坦である。径1.0m、深さ0.5mである。

第５号～第11号土壙は第１号住居跡の南西、Ｉ６・７グリッドから集中的に検出されている。第５号、第８号、第11号土壙はＩ７グリッド、第６号、第７号、第９号、第10号土壙はＩ６グリッドで見つかっている。

第５号土壙の平面形は不整形である。長径×短径×深さは1.2×1.0×0.4mである。

第６号土壙の平面形は不整形である。長径×短径×深さは0.8×0.6×0.2mである。主軸方向はＮ—28°—Ｗである。

第７号土壙の平面形は不整形である。長径×短径×深さは1.4×0.9×0.4mである。主軸方向はＮ—14°—Ｗである。

第８号土壙の平面形は円形である。径0.7m、深さ0.2mである。

第９号土壙の平面形は不整の楕円形である。長径×短径×深さは2.4×1.7×0.3mである。主軸方向はＮ—20°—Ｗである。底面は平坦である。後期前葉の無文の小破片が出土している。

第10号土壙の平面形は楕円形である。底面は平坦である。長径×短径×深さは1.6×1.3×0.2mである。主軸方向はＮ—90°—Ｗである。

第11号土壙の平面形は円形である。径0.8m、深さ0.1mである。底面は平坦である。

土壙出土土器（第23図、第24図）

第３号～第８号土壙出土土器を第23図、第24図に示した。第23図38は土製の蓋で、それ以外はいずれも深鉢形土器である。

第23図１～10は第３号土壙出土土器である。いずれも堀之内１式である。

１～６は口縁部の破片である。１は波状部の破片である。円孔を施す。２は口縁部が「く」の字状に内折する形態の深鉢形土器の口縁部である。３は無文の口縁部破片である。４は円文を口縁部に巡らせる。縄文はLR。５は口縁部に1条沈線を巡らせる。地文縄文上に縦位の沈線を施す。縄文はLRの横位施文。６は無文の口縁部を１条の沈線で区画し、沈線下にRLの縄文を斜位に施文する。

７～10は胴部破片である。７、８は沈線文、９、10は縄文と沈線文を施す。縄文はLRの横位施文である。

第23図11～21は第４号土壙出土土器である。いずれも称名寺式である。

11、12は口縁部の破片で2条の沈線間に縄文を充填する。縄文はLR。13、14は無文の口縁部である。14は口縁部が「く」の字状に内折する形態である。

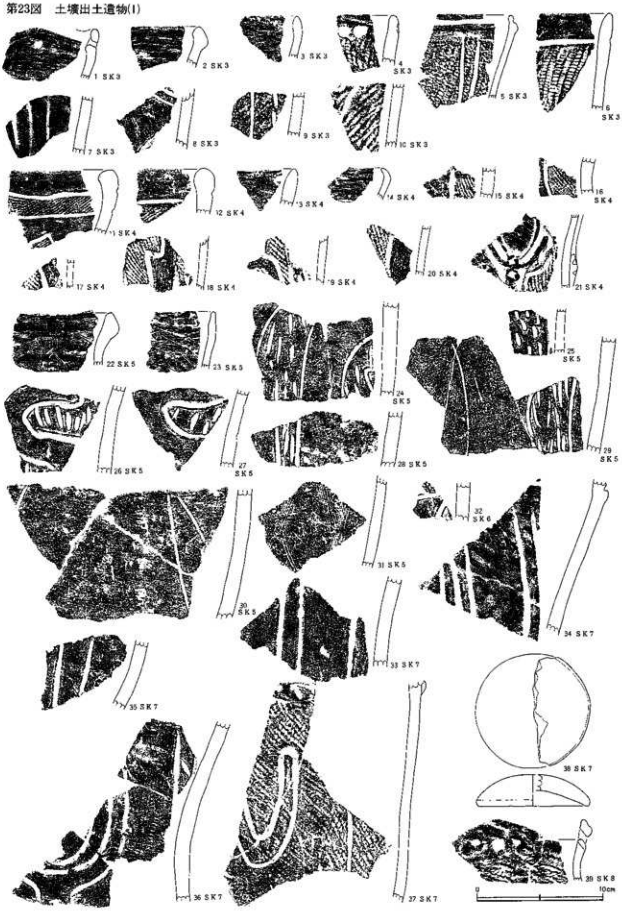
15～20は胴部の破片である。いずれも２条沈線間に縄文を充填施文する。15はRL、16はLRである。17～20は同一個体である。18、19には点列を施す縦位の隆帯の一部が認められる。縄文はLRである。21は曲線状の隆帯下に点文を施した隆帯を垂下させている。縄文はLRである。

第23図22～31は第５号土壙出土土器である。称名寺式であろう。

22は胴部に括れを持つ形態で、口縁部が肥厚する。23は単純な形態の深鉢形土器で器面には擦痕状の調整痕を残している。

24～30は沈線間に短沈線的な列点を施す土器である。24、28～30は同一個体である。短沈線的な列点は長さにばらつきがあり、施文も整然としていない。30は胴部下半の破片で、沈線文のみ見られる。25も縦位の沈線がみられ、これに沿って複列に列点が施される。26は文様を施文する２条の沈線と直交する方向に短沈線が加えられている。７も同様な傾向がある。31は胴部破片で櫛歯状工具による条線文が施される。

第23図　土壌出土遺物(1)



第23図32は第６号土壙出土土器である。沈線間に縄文が施される。称名寺式であろう。

第23図33～37、第24図は第７号土壙出土土器である。いずれも堀之内１式である。

33～36は沈線文のみが認められる土器である。33～34は縦位の沈線文等が施される。胴部で緩く張る形態の深鉢形土器である。33、34は胴部の破片である。35は口縁部近くの破片である。口縁部は「く」の字状に内折し、沈線が巡る。36は括れ部上の破片で、３条１組の沈線文により曲線モチーフを施す。

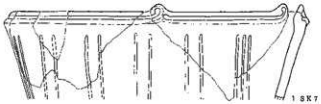
37は底部から口縁部まで直線的に立ち上がる形態の深鉢形土器である。口縁部を欠いており詳細は不明だが、口縁下に点列を施した隆帯を巡らせる土器である。地文縄文状に「Ｊ」字状のモチーフが施す。縄文はLRの横位施文である。

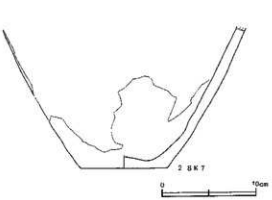
38は土製の蓋である。無文。径９cmである。

第24図１は胴部が緩く張る形態の深鉢形土器であろう。内折する口縁部に１条沈線を巡らせる。変所に山形の突起を施す。体部には２～３条の沈線を垂下させている。口縁部の１／２が残存する。２は深鉢形上器の底部の破片である。

第23図39は第８号土壙出土土器である。突起部に円孔し、点文を施す。LRの縄文を縦位に施している。堀之内１式である。

第24図　土壙出土遺物(2)





（３）遺構外出土遺物

遺構外出土遺物として縄文時代早期から後期中葉の土器と石器が見つかっている。土器は大きく５群にわけて説明する。

第１群土器（第25図１～６）

縄文時代早期の土器を一括する。

１、２は早期初頭の撚糸文系土器群である。１は口唇部に２段の施文をしている。井草式である。２は胴部破片である。

３～５は早期中葉の沈線文系上器群である。同一個体である。ほぼ直立する胴部の破片である。横位の沈線施文の後、斜位の沈線を施文している。三戸式であろう。

６は無文土器である。胴部は直立気味に推移し、口縁部が外傾する形態である。早期中葉に伴う土器であろう。

第２群土器（第25図７～12）

縄文時代前期の土器を一括する。前期後葉の諸磯式である。

７～９は胴部中位から口縁部にかけて外傾して立ち上がる形態の深鉢形土器である。同一個体である。竹管文による直線的な綾杉状の文様が横位に連続する。縄文はRLである。10は胴部破片で、爪形文を施す。11、12は口縁部が外形する形態の深鉢形土器である。同一個体である。櫛歯による３本単位の沈線により、横位の沈線文、波状文が施される。縦位にも短い沈線文を垂下させている。

第３群土器（第27図１、２）

縄文時代中期の上器を一括する。

１は勝坂式で、爪形文を横位、波状に施している。２は加曽利Ｅ式のキャリパー形の深鉢形土器である。Ｓ字状の隆帯を横位に施す。Ｌの撚糸文を施す。

第4群土器（第26図、第27図3～38、第28図、第29図、第30図1～5）

後期前葉の株名寺式、堀之内式を一括する。

第26図は胴部下半から底部にかけての破片である。

1は胴部を横位の沈線で区画し、その下に2条1組の沈線により鬚掃状のモチーフを横位に4単位に施し、列点を施文する。

2は胴部が強く張る形態の深鉢形土器である。曲線的なモチーフとスペード状のモチーフを施している。要所に点文のある円形の貼付文を施文する。

3は底部から直立気味に立ち上がり、胴部がごく緩く張る形態の深鉢形土器である。地文縄文上に文様を施す。縄文はLRを横位に施す。

4は胴部が緩く張る形態の深鉢形土器であろう。縦位、斜位の沈線が施されている。

第27図3～5は胴部が張る形態の深鉢形土器で、2条の沈線間に縄文を施す土器である。縄文はLRである。

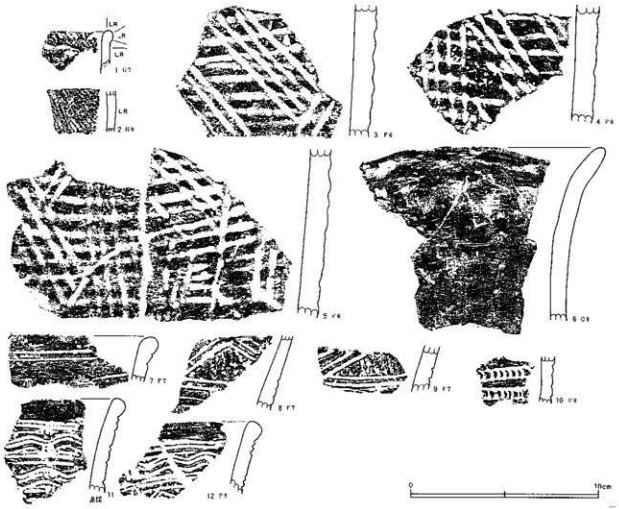
第27図7～18は2条の沈線間に列点文等を施す土器である。

7～10は口縁部の破片である。7、8、10は口縁部が外形する形態である。9は口縁部付近でやや丸みを帯びて立ち上がる形態である。

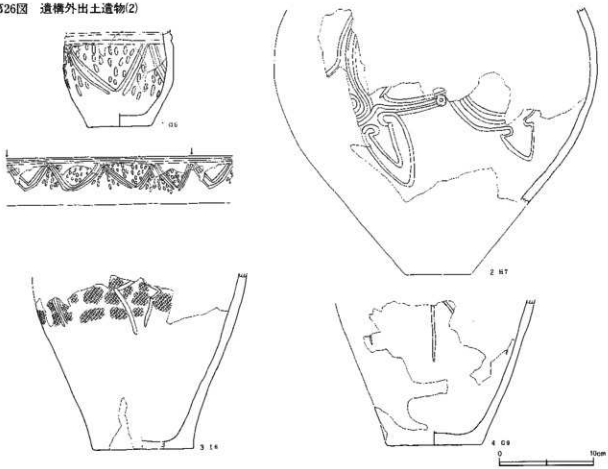
12～17は胴部の破片である。曲線的なモチーフが施される。13、17は短沈線状の列点が施される。17はネガポジの構成がくずれている。18は櫛歯状工具による条線を施文する。

第27図19、20は把手部の破片である。19は大きな波状を呈するものである。20は円文と沈線文が隆帯上に施されている。円孔を施す。

第25図　遺構外出土遺物(1)



第26図　遺構外出土遺物(2)



第27図21～27は胴部に括れを持つ形態で、口縁部が「く」の字状に内折、もしくは肥厚する形態の土器である。

21～24は同一個体である。円形の貼付文が施される。23、24は把手部近くの破片と思われ、沈線が施文されている。

25、26は同一個体である。25は括れ部に「8」の字状の文様を横状に施す。点列を施した隆帯を巡らせる。26は25と同様な文様を口縁部に施す。27は口縁部が肥厚する。横位の沈線が認められる。

第27図6は底部から口縁部へ直線的に移行し、口縁部が直立気味に立ち上がる形態の土器である。円孔のある山形の突起を施す。体部にはJ字状の磨消部を配している。縄文はLRである。

第27図28は口縁部に沈線を巡らせる上器である。底部から口縁部へ直線的に移行する形態であろうか。突起部の破片である。円文や円孔を施す。

第27図29～38は胴部が緩く張る形態の深鉢形上器である。口縁部に沈線を巡らせる上器である。いずれも口縁部の破片である。

29は突起部である。円文と弧線文を施す。30は横位の沈線文と曲線が施されている。31は口縁部の沈線が途切れる部分を隆帯状に盛り上げている。体部には横位の沈線文が見られる。32は縦位の沈線文が施されている。33は横位の沈線施文後、縦位の短沈線が施されている。34～36、38は口縁部の1条沈線のみが見られる破片である。37は2条の沈線文が口縁部に巡る。縦位の沈線文間を横位、斜位の沈線文でつなぐ文様を施す。

第28図には縄文が施文されない胴部の破片をまとめた。いずれも深鉢形土器の胴部破片である。

第28図1～3は曲線的なモチーフを2条の沈線によって施し、沈線間に列点を充填する。短沈線状の列点文で区画内に雑然と施されている。

第28図４は列点文のみが認められる。列点の下位は施文時の粘土の盛り上がりを残す。

第28図５～12は曲線的な文様を沈線文によって施している。

第28図13、14は胴部を横位の沈線文により区画する土器である。13は２条の沈線を巡らせる。円形の貼付文を施す。横線の区画の下位には曲線的な沈線文を施す。14は３条１組の沈線により、渦巻状の文様を施す。

第28図７、８は同一個体である。８は縦位の沈線文を垂下させ、３条１組の斜沈線を施している。曲線的な文様が付け加えられている。７も同様に付加的な文様であろう。

第28図15、16は縦位、斜位の沈線が見られる。縦位の沈線間を斜位の沈線でつないでいくモチーフであろう。

第28図17、18、21、22なども同様なモチーフと思われ、17は斜位の沈線文、18、21、22は縦位の沈線文が施されている。

第28図19、20は底部近くの破片である。モチーフは不明であるが、縦位の沈線文の下端が見られる。

第29図には地文に縄文を施す深鉢形土器をまとめた。１～７、24～29が口縁部、８～19が胴部の破片である。

第29図１、２は口縁部に２条の沈線を巡らせる。胴部がごく緩く張る形態の土器である。１は２条の沈線を枠状につなげており、円形の貼付文を施している。貼付文の下位に蛇行沈線文を垂下させる。２も蛇行沈線文を垂下させている。縄文はLRを横位に施文している。

第29図３、４、７は１条の沈線のみが認められる。胴部が張る形態の土器である。縄文はいずれもLRを横位に施文する。

第29図５、６も胴部が張る形態の土器である。５は斜位に多条の沈線文を施す。６は曲線が施される。縄文はLRを横位に施文する。

第29図８は底部から口縁部へ直線的に移行する形態の土器である。口縁部付近を無文としている。蕨手状の文様が施されるのであろう。縄文はLRを横位に施文する。

第29図９は胴部が緩やかな丸みを帯びて立ち上がる形態の土器である。２条の沈線によるモチーフの下位にスペード状の文様が施される。縄文はLRを横位に施文する。地文施文後に文様が施されており、２条の沈線間の縄文は磨消されているが不完全である。

第29図10、11、13は同一個体である。口縁部近くの破片で、やや外反気味に立ち上がる形態である。地文縄文上に蕨手状の沈線文が施されている。縄文はLRの横位施文である。沈線文の内部は磨消しがなされているが不完全である。

第29図12は緩く張る胴部の部位で縦位の沈線が施されている。14は直線的な形態の土器であろう。蕨手状の文様を施す。文様内を磨消していない。15は縦位の２条沈線間に短沈線状の点列を施す。16は縦位の沈線が見られる。沈線間を磨消している。17は斜位の沈線が見られる。沈線間を磨消している。18は２条１組の蛇行沈線が垂下している。沈線間は地文を残している。いずれも縄文はLRを横位に施文する。

第29図19は口縁部が外反する形態の土器である。「U」字状のモチーフが施され、文様内にはLRの縄文が縦位に充填されている。

第29図24～27は口縁部に円形の窪み、刺突文を巡らせる土器である。20～24は円形の窪み、25～27は刺突文を施す。

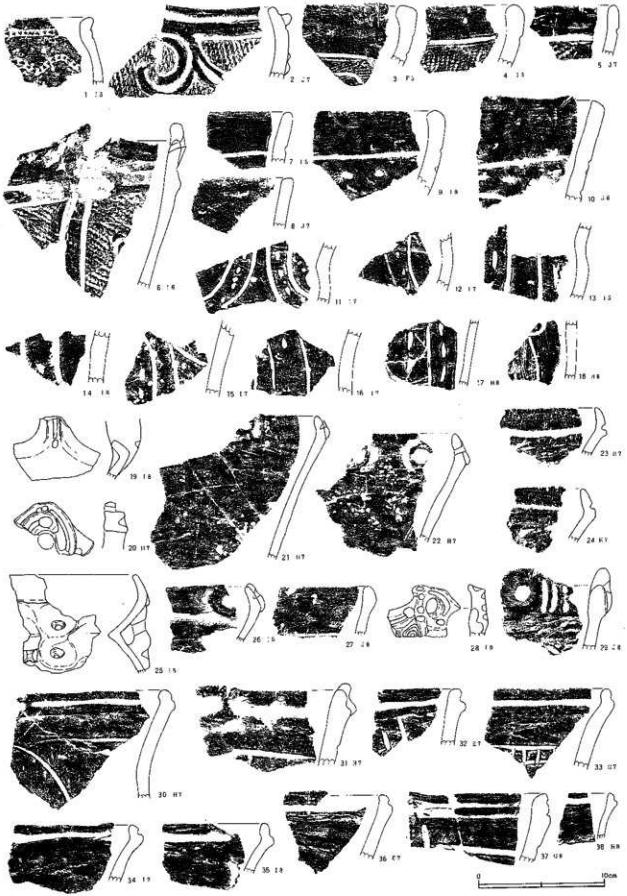
第29図20、21、24は胴部が張る形態で、口縁部が内傾する土器である。20、21は縦位の沈線と縄文が見られる。24は２条１組の沈線によって大柄な渦巻状のモチーフを施す。沈線間は短沈線を充填する。

第29図22、23、25～27は単純な形態の深鉢形土器であろう。22,25はLR,23はRLを横位に施文する。26、27は縄文が施文されていない。

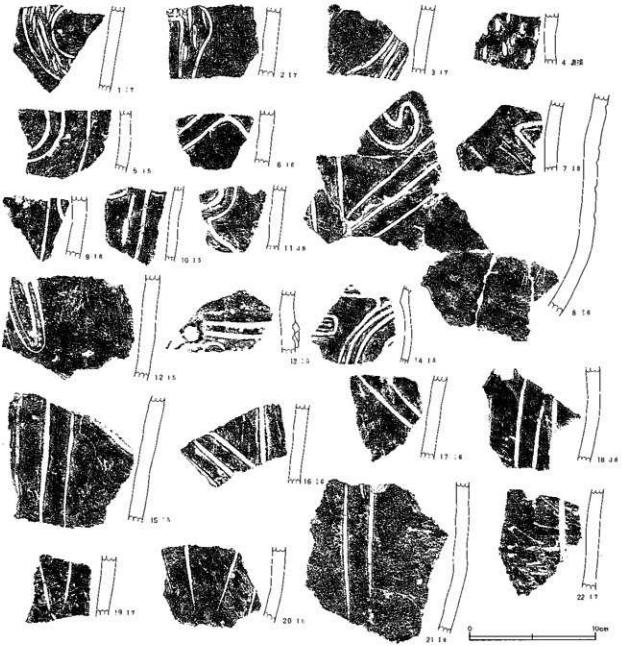
第29図28、29は単純な形態の深鉢形土器で縄文のみが施文される。縄文はLRの横位施文である。

第30図１～5は堀之内２式である。

第27図　遺構外出土遺物(3)

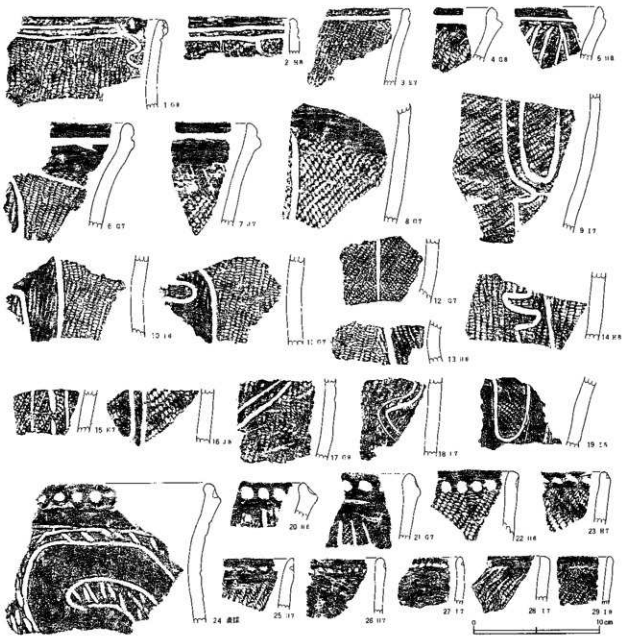


第28図　遺構外出土遺物(4)



1は朝顔形の形態の深鉢形土器である。口縁部に1条沈線を巡らせる。口辺部には刻みを施した隆帯を巡らせる。2は刻みを施した隆帯を縦位に施す。これに並行して沈線文が施文されており、縄文を充填する。縄文はLRである。3は底部から口縁部へ直線的に移行する形態の深鉢形土器である。器面は研磨調整が雑で、擦痕等を残している。沈線は細い。2条の横位の沈線を斜沈線で結ぶ三角形のモチーフである。縄文は施されていない。4は胴部で屈曲し、体部が直立気味に立ち上がる形態の上器である。縦位の区画文を残している。縦位の沈線を横位、斜位、弧線で繋いでいる。RLの縄文を横位に施文している。5は朝顔形の形態の深鉢形上器の胴部破片である。横位に区画した文様帯に2条の直線文、弧線文によってモチーフを施す。沈線間に縄文を施す。縄文はLRである。

第29図　遺構外出土遺物(5)



第5群土器（第30図6～13）

後期中葉の加曽利B式を一括する。

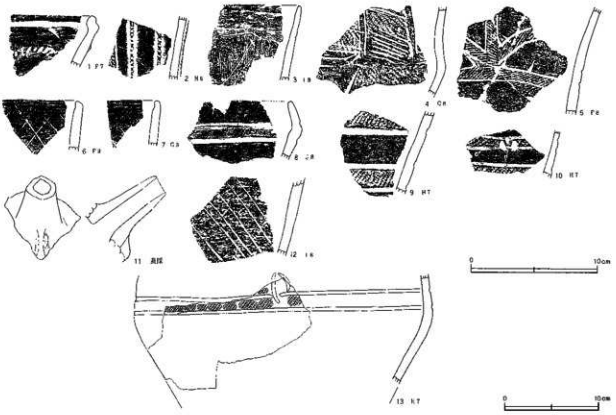
6、7は口縁部が直立気味に立ち上がる形態の深鉢形土器である。同一個体である。格子目文を器面に施す。口縁部内面に1条沈線を巡らせる。加曽利B1式である。

8～10、13は3単位の把手をもつ深鉢形上器等である。縄文はいずれもLRである。8は口縁部に2条沈線を巡らせる。縄文が施されるがまばらである。9は括れ部上位の破片である。10は小ぶりの括弧状文が施されている。13も横線文と括弧状文が施されている。胴部の張る部位の直上に文様が施されている。いずれも加曽利B2式である。

11は注口土器の注口部である。注口部の下に貼付文が施される。

12は胴部の破片で、斜沈線が施されている。器面は研磨されずに擦痕を残している。加曽利B3式であろう。

第30図　遺構外出土遺物(6)



石器（第31図）

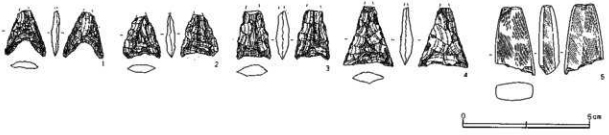
1～4は石鏃である。いずれも先端部が欠損している。

1は無茎で基部に抉りのある形態である。残存長18mm、幅16mm、厚さ2.8mm、重さ0.52gである。黒曜石製。D4グリッドから出土している。

2～4は無茎で基部に弱い抉りがある形態である。2は残存長17mm、幅15mm、厚さ3.5mm、重さ0.79gである。チャート製。D3グリッドから出土している。3は残存長19.2mm、幅13.5mm、厚さ5.1mm、重さ1.36gである。チャート製。F7グリッドから出土している。4は残存長23.9mm、幅19.5mm、厚さ5.0mm、重さ1.72gである。チャート製。F9グリッドから出土している。

5はミニュチュアの磨製石斧である。刃部が欠損している。残存長27.3mm、幅15.5mm、厚さ8.2mm、重さ5.47gである。蛇紋岩製である。I9グリッドから出土している。

第31図　遺構外出土遺物(7)



3　弥生時代

（1）遺構（第32図）

第3号住居跡の1軒である。

平面形は楕円、長軸方向はN−34°−Wである。長軸方向側の径は長さ6.8m、これに直交する短軸方向側の径は6.2mである。深さは0.6mである。他の遺構の重複はない。柱穴は4本である。

壁は垂直に近い傾斜で立ち上がる。壁溝はない。

床面の状況は、中央部分がかなり硬化している。周辺部はわずかに柔らかい。南西側には、いわゆるベッド状遺構が認められる。ロームを掘り残して作出しており、壁に沿って幅1.1〜1.3m、長さ約4mにわたる。それ以外の床面はほぼ平坦であり、ベッド状遺構との比高差は6cm程度である。

炉は主軸上のやや西よりに位置している。形態は円形、中央部分が焼けて硬化している。東側から南側の壁近く、床面直上で土器が出土している（図版14）。住居跡の時期は、出土遺物より後期に比定される。

（2）遺物（第32図1〜16）

第3号住居跡出土土器である。図示可能なものは台付甕2点、甕4点、壺7点、高坏3点の計16点である。

台付甕（1、3）

1は口径が20.0cm、胴部最大径20.5cmで口径と胴部最大径がほぼ等しい。現存高は19.8cmである。実測部位はほぼ完存する。口縁部は胴部と粘土紐を連続的に積み上げることにより接合されている。胴部の成形は3回に渡って行われたと考えられ、胴部中位の上下方に顕著な接合面がみられる。口縁部にはやや右に傾く棒状工具による押捺が施される。器外面の調整は木口状工具によるナデのみである。胴下半は2次加熱による変化が著しく判然としないが、同一工具によるものと思われる。器内面の調整は木口状工具によるナデ後、それをナデ消している。色調は黄橙色で外面には全面に煤が付着する。2次加熱は外面胴下半において顕著であり、一部赤変する。

3は脚台部径が12.2cm、現存高が8.7cmで、実測部位ではほぼ完存する。脚端部は面取りされる。胴部との接合は正位の状態で粘土紐を貼付けて行れている。器内外面の調整は木口状工具によるナデである。器外面には煤の付着がみられ、内面は赤彩されている。色調は暗黄橙色で焼成は良好である。

甕（2、14〜16）

本来は脚台を持つものと考えられるが、口縁部、胴部のみの資料であるため、甕としておきたい。

2は内外面木口状工具によるナデ調整のもので、口径20.0cm、現存高3.8cmに復元できる。口唇部には断面三角形の工具により右方向から押捺が施される。口縁部は1よりも鈍角的に外反するが、やはり粘土紐を連続的に積み上げることにより成形されている。色調は黄橙色。焼成良好である。

14は粘土紐の積上痕を明瞭に残す。外面は指頭による押え後ナデ、内面はナデ調整である。口縁端部外面に断面三角形の工具により、右方向からの押捺が施される。色調は黄橙色で外面には煤が濃く付着する。

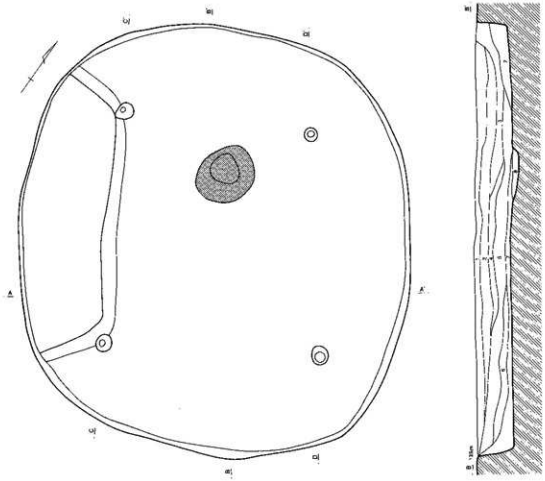
15・16は外面刷毛目調整によるもので、15には縦後横の、16には縦後斜めの刷毛目が施される。内面はいずれも木口状工具によるナデ調整である。両者とも煤の付着が認められ、16は2次加熱により赤変する。色調は15が淡黄橙色、16が暗褐色である。

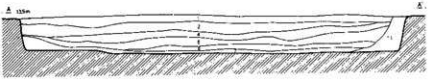
壺（4〜6、9〜12）

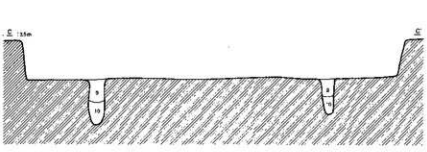
4は口縁部のみの破片で、口径15.0cm、現存高6.4cmに復元できる。内弯する形態をとり、口縁部は面取りされる。口唇部には刷毛目後LRの縄文が施される。器外面は粗い刷毛目後6段のLRの縄文が施文される。頸部以下はごく一部が遺存するのみで不明だが、ヘラ磨きが施され、赤彩されると思われる。内面は横方向の丁寧なヘラ磨きで赤彩される。色調は黄橙色で残存度は25%である。

5・6は底部の破片である。5は底径9.4cm、現存高3.2cmに復元できるもので、底部の70%ほどを欠失している。色調は暗赤褐色である。器外面は底部

第32図　第３号住居跡

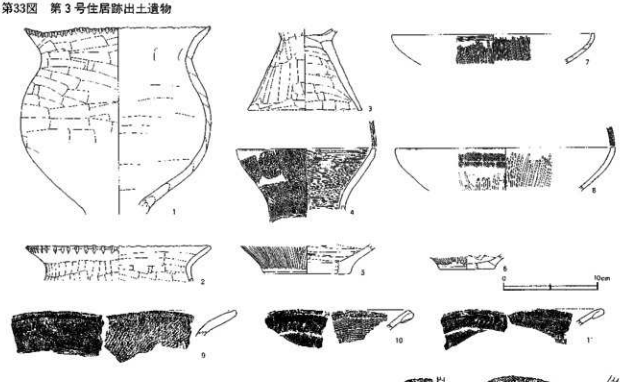






1　黒色土
　1 mm 程度の細砂粒を若干含む。
2　褐色土
　直径１～２ mm のロームブロックを含む。
　１～３ cm のロームブロックを多く含む。
3　黒褐色土
　１～２ mm のロームブロックと１～２ cm
　程度のロームブロックを含む。
4　褐色土
　２層とほぼ同様である。
5　黒褐色土
　３層に比べてロームがやや多い。
6　黒褐色土
　２～３ mm 程度のロームブロックを含む。
　１ mm 程度の粘土粒子、１ mm 以下の炭
　化物を多少含む。
7　黒色土
　１～２ mm 程度のローム粒子と、
　２ cm 程度のロームブロックを含む。
　炭化物、焼土は含まれていない。
8　黒褐色土
　焼土粒子を多く含む。
9　茶褐色土
　ローム粒子を含む。
10　黄褐色土
　ロームブロックを多く含む。
11　黒色土

第33図　第３号住居跡出土遺物



を除き赤彩される。胴部外面は縦方向のヘラ磨き、内面は木口状工具によるナデである。底面は木口状工具による調整と思われるが遺存が悪い。６は小型の壺の底部としたが、鉢等の可能性もある。底径6.0cm、現存高1.6cm に復元でき、残存は10%である。胴部外面縦方向のヘラ磨きで底部外周は工具によりナデられ、赤彩される。内面は木口状工具によるナデで、底部も同様である。色調は黄褐色である。

９～12は口縁部の破片である。９は単純口縁の口縁部で、口唇部は面取りされる。外面は横位のナデ後、斜め方向のヘラ磨きが施される。内面には RL の縄文が２段以上施され、その各々がくずれたＳ字状の結節文により区画される。内外面とも赤彩される。

10～12は複合口縁の壺の口縁部である。いずれも複合部は狭く、外面に左下がりの浅い押捺が施され、口唇部を面取りする。10・11は外面の全体を木口状工具によるナデ後、縦位のヘラ磨きを複合部より下位に施す。内面はいずれも横方向の刷毛目が施される。12の内面はナデられている。色調は16が黒褐色、10が明褐色、12が黄灰色である。

高坏（７、８、13）

７は無文の破片で、口径21.8cm、現存高3.2cm に復元できる。口唇部は面取りされる。内外面とも縦方向のヘラ磨きを行っている。内外面赤彩。

８・13は口縁部に縄文が施されるものである。８は口唇部、口縁部外面に RL の縄文が施される。無区画である。文様帯より下位の外面は横位の木口状工具によるナデ後縦方向のヘラ磨きを施し、内面も同様である。文様帯を除く内外面が赤彩される。13は口唇部が面取りされ、その口唇部と口縁部外周に RL の縄文が施される。口縁部外周の縄文帯はＳ字状の結節文により区画される。外面の文様帯より下位は縦方向の、内面は横方向のヘラ磨きが施される。文様帯を除く内外面が赤彩される。

4　平安時代

遺構（第34図）

第4号住居跡の1軒である。

E2、F2グリッドに位置する。平面は隅丸長方形である。長径×短径×深さは4.6×3.1×0.14mである。主軸方向はN－72°－Eである。

カマド1基が見つかっている。支脚の下端（第35図9）が残存していた（図版16）。床面はやや軟弱であった。確認面から床面までの深度は浅く、出土遺物は床直かそれに近い状況であった。柱穴等は見つからなかった。出土遺物等より平安時代に比定される。

遺物（第35図1～10）

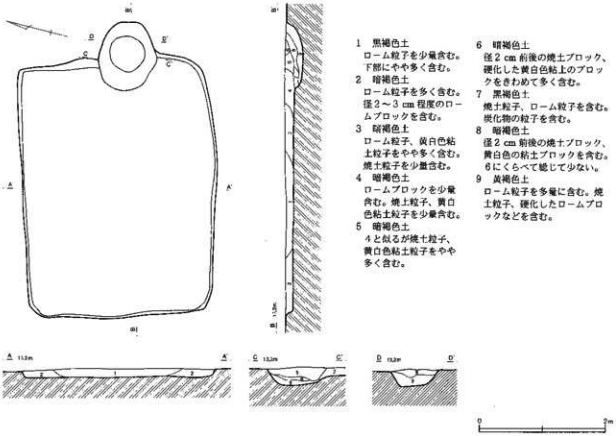
第4号住居跡出土のものである。

図示可能な遺物は土師器の甕、坏各1点、須恵器の坏4点、高台付坏2点、土製支脚1点、砥石1点である。

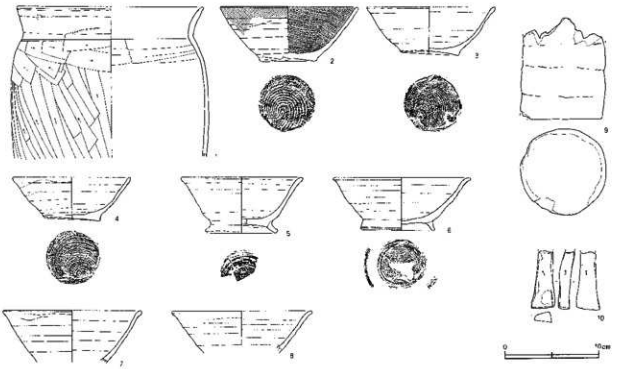
土師器の甕は胴部中位までが遺存する1のみである。長胴の胴部から「く」字状に直線的に外反する口縁部に至る。口縁部の外面上段には粘土紐の接合痕が明瞭に残る。器外面の調整は胴部中位のヘラ削りが右下方から左上方にかけて右回りに施され、肩部には右回りの、頸部直下には左回りのヘラ削りが施され、その後に口縁部を強く横ナデしている。口縁端部は丸く収まり、外面直下がナデによりやや凹む。ヘラ削りは刃子を用いて行われたと考えられ、頸部付近にヘラ削りが行われた際に挟れた痕跡が明瞭に残る。胴部内面は木口状工具によるナデ後、ナデ消している。肩部には木口状工具の痕跡が残る。口縁部は木口状工具によるナデ後、横ナデを施している。外面は被熱により赤変する部分が多い。

土師器の坏は2のみである。器内面に吸炭処理を施

第34図　第4号住居跡



第35図　第４号住居跡出土遺物



すいわゆる内黒土器である。右回転のロクロにより成形される。器外面には右上がりの粘土の接合痕が見られる。器内面の吸炭が器外面の口縁部と体部の一部に及んでいる。器内面は吸炭処理が施され、ヘラ磨きされる。ヘラ磨きは６単位の右下→左上のものが下位から上方に施された後、底面付近は横位に施している。底面は回転糸切り未調整で、糸目痕の間隔が広い。

須恵器は７を除きすべて酸化焔焼成のいわゆる土師質須恵器と呼ばれるものである。坏はほぼ完形に近い３・４と口縁～体部の破片である７・８がある。後者は高台付坏の可能性もある。いずれの坏も右回転のロクロ成形で、歪みが著しい。

３・４は底部が甲壮作りのもので、底部の外周には切り離しを容易にするために指を入れた痕跡が明瞭に残る。体部は３が引き上げの単位が大きく、４はほぼ均等である。４の外面には粘土の接合痕が右上がりに認められる。両者とも内外面に煤が付着する。７は環元焔焼成である。口縁部外面に粘土の接合痕が認められる。器内外面とも風化が著しい。胎土が他の個体と異なり、粒径が粗く、斜長石と考えられる白色粒子が多い。８は酸化焔焼成である。口縁部外面に粘土の接合痕が認められる。口縁上位は一度に引き出されたようで、体部上半にやや強い綾が残り、外側に開いている。

５・６は高台付坏である。いずれも右回転のロクロ成形である。５は焼成温度が高く、一部環元状態にな

第３表　土器観察表

番号	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	胎土	焼成	色調	残存率(%)	備考
1	甕	20.0	(16.2)	—	石英、角閃石、白色粒子、赤色粒子	良好	黄橙色	70	
2	坏	15.0	5.7	6.2	角閃石、赤色粒子、白色粒子、雲母	良好	黄褐色	80	土師器
3	坏	13.6	5.1	6.3	石英、角閃石、白色粒子、赤色粒子、黒雲母	良好	黄橙色	80	酸化焔焼成
4	坏	12.6	4.7	6.0	角閃石、石英、白色粒子、赤色粒子、雲母	良好	黄橙色	90	酸化焔焼成
5	坏	(13.0)	6.0	(7.6)	石英、角閃石、赤色粒子、白色粒子、黒雲母	良好	黄灰色	30	酸化焔焼成
6	坏	14.6	5.7	7.8	石英、角閃石、白色粒子、赤色粒子、雲母	良好	黄橙色	60	酸化焔焼成
7	坏	14.8	(5.6)	—	石英、角閃石、白色粒子、雲母	良好	灰白色	15	環元炎焼成
8	坏	15.0	(5.4)	—	石英、角閃石、白色粒子、赤色粒子、雲母	良好	黄橙色	15	酸化焔焼成

っているか焼き歪みが著しい。口縁端部外面に粘土の接合痕が認められる。高台は底部外周を削り取った後、貼付したものでハの字状に外側に開いている。底面は回転糸切り離しである。糸目痕の間隔は狭い。胎土中に径1～5mmの小礫を含んでいる。6はロクロの回転痕が均等に明瞭に残り、口縁部がやや外側に引き上げられるものである。器外面の体部中位に粘土の接合痕が認められる。高台は底部外周を削った後に貼付されている。底面は回転糸切り離しである。体部の内外面に黒斑が認められる。

9は土製支脚である。径8～9cm、厚さ2.5cmほどの粘土板を積み上げる。積み上げ痕が比較的よく残り、4段目までが遺存している。外面はヘラ状工具により、ナデられたようであるが風化が著しく不明瞭である。底面は回縁の工具で平滑に仕上げられている。被熱により、外面は一部環元状態となり、内部は赤変している。

10は砥石である。安山岩製で端部の片方を欠失し、残存長は6.2cmである。重量24.8gである。使用頻度がかなり高く、使い込まれた感を受ける。

5　中・近世

中・近世の遺構には溝3条、土壙18基、柱穴がある。これらの遺構からは図化し得る出土遺物はなく、遺構の明確な時期を限定することはできない。

当発掘区の南に隣接する大宮市の調査区からは中・近世の陶磁器、板石塔婆が出土している（田代　小川 1995）。今回の調査では遺物の出土はなかったものの、中・近世における遺構の広がりが当調査区に及んでいると見ることができよう。

（1）溝（第36図）

3つの溝はそれぞれ規模は異なるものの、南北と東西の2方向に延び、さらに発掘区外へ続いている。溝の覆土はいずれも自然堆積であり、黒色土ないしは暗褐色土であった。

第1号溝

E5～7、F5、G4・5、H4・5、I4・5グリッドに位置する。検出された長さは67mにわたっている。幅は約2m、深さ約0.6mである。

底面はほぼ平らで、底面より傾斜をもって立ち上がり、途中から立ち上がりが緩やかになる。

大宮市教育委員会調査の第1号溝に続くものと思われる。溝は調査区南端よりほぼ北に向かって延びており、第2号溝付近で東へと向きをかえ、第2号溝と合流している。

第3号溝とは南北方向に延びる部分で約13mの距離をおいてほぼ並行している。第1号溝が東西方向に延びるているE6グリッドで第3号溝と交わっている。第2号溝、第3号溝との新旧関係は明らかにし得なかった。

第2号溝

E2～7グリッドに位置する。検出された長さは50mにわたっている。幅約1m、深さ約0.4mである。

東西方向に直線的に延びている。底面はほぼ平坦で断面形は台形に近い。

溝の東半は第1号溝とE5グリッドで合流し、北側の立ち上がりをそのまま残しながら、東の発掘区外へと延びている。

第3号溝

グリッド6列をほぼ縦断する位置にある。検出された長さは70mにわたっている。幅は約1m、深さ約0.4mである。

J6グリッド北付近で浅く不明瞭になっている。J6グリッドからG6グリッドにかけては2本の溝が平行する形状で、西側が深く、東側が浅い（第36図C—C'）。G6グリッドにおいて東側が不明瞭になっている。第1・2号溝と直交し、斜面へと延びている。

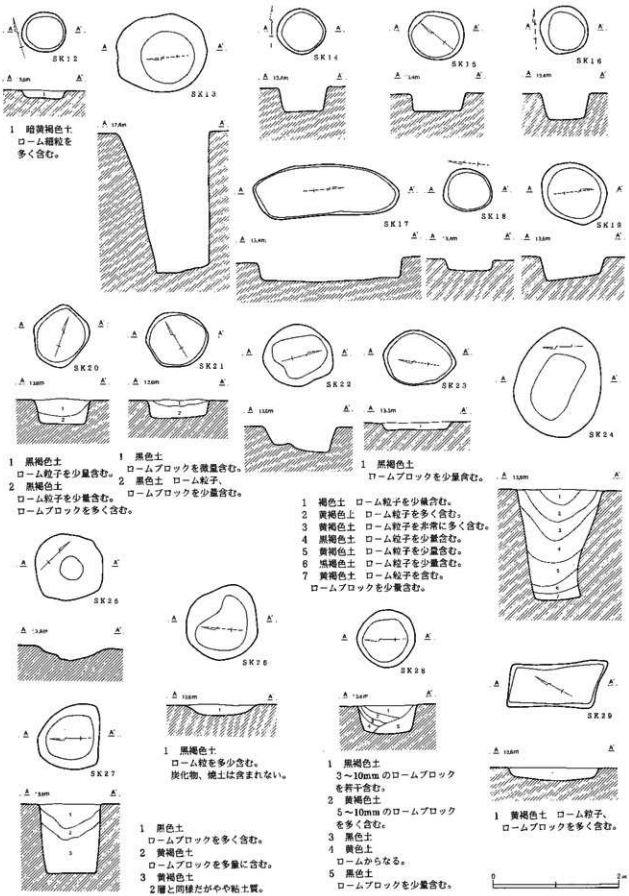
斜面部分のC・D6グリッドでは東側が深くなる部分（第36図B—B'）、長方形の掘り込みとなる部分などの変化がある。

（2）土壙（第37図）

18基の土壙は最も北側で見つかった第13号土壙を

第36図　溝

第36図　土壙


SK12
SK13
SK14
SK15
SK16
SK17
SK18
SK19
SK20
SK21
SK22
SK23
SK24
SK25
SK26
SK27
SK28
SK29
1　暗黄褐色土
ローム細粒を
多く含む。
1　黒褐色土
ローム粒子を少量含む。
2　黒褐色土
ローム粒子を少量含む。
ロームブロックを多く含む。
1　黒色土
ロームブロックを微量含む。
2　黒色土　ローム粒子、
ロームブロックを少量含む。
1　黒褐色土
ロームブロックを少量含む。
1　褐色土　ローム粒子を少量含む。
2　黄褐色土　ローム粒子を多く含む。
3　黄褐色土　ローム粒子を非常に多く含む。
4　黒褐色土　ローム粒子を少量含む。
5　黄褐色土　ローム粒子を少量含む。
6　黒褐色土　ローム粒子を少量含む。
7　黄褐色土　ローム粒子を含む。
ロームブロックを少量含む。
1　黒褐色土
ローム粒を多少含む。
炭化物、焼土は含まれない。
1　黒褐色土
3～10mmのロームブロック
を若干含む。
2　黄褐色土
5～10mmのロームブロック
を多く含む。
3　黒色土
4　黄色土
ロームからなる。
5　黒色土
ロームブロックを少量含む。
1　黄褐色土　ローム粒子、
ロームブロックを多く含む。
1　黒色土
ロームブロックを多く含む。
2　黄褐色土
ロームブロックを多量に含む。
3　黄褐色土
2層と同様だがやや粘土質。
0
2m

除くと、いずれも調査区の南半に分布している。

G3グリッド、H5グリッド、H8グリッド周辺などでやや集中する傾向がある。

第12号土壙はI7グリッドに位置する。平面形は円形である。底面は平坦である。長径×短径×深さは0.7×0.6×0.1mである。

第13号土壙はB3グリッドに位置する。平面形は不整楕円形である。長径×短径×深さは1.4×1.2×2.2mである。深い土壙であり、他の土壙とは離れた位置から見つかっている。

第14号土壙はF3グリッドに位置する。平面形は円形である。底面は平坦である。長径×短径×深さは0.8×0.7×0.4mである。

第15号土壙はF・G3グリッドに位置する。平面形は円形である。底面は平坦である。長径×短径×深さは0.9×0.8×0.3mである。

第16号土壙はG3グリッドに位置する。平面形は円形である。底面は平坦である。規模は径0.8m、深さ0.4mである。

第17号土壙はG3グリッドに位置する。平面形は不整の長楕円形である。底面はほぼ平坦である。長径×短径×深さは2.3×0.8×0.3mである。主軸方向はN—7°—Eである。

第18号土壙はG3グリッドに位置する。平面形は不整円形である。底面は平坦である。長径×短径×深さは0.8×0.7×0.2mである。

第19号土壙はG5グリッドに位置する。平面形は不整円形である。底面はやや傾斜している。長径×短径×深さは1.1×0.9×0.4mである。

第20号土壙はH5グリッドに位置する。平面形は不整円形である。底面は平坦である。長径×短径×深さは1.0×0.8×0.4mである。

第21号土壙はH5グリッドに位置する。平面形は不整円形である。底面は平坦である。長径×短径×深さは1.0×0.9×0.3mである。

第22号土壙はH5グリッドに位置する。平面形は不整円形である。底面には凹凸がある。長径×短径×深さは1.1×1.0×0.4mである。

第23号土壙はF7グリッドに位置する。平面形は楕円形である。底面は平坦である。長径×短径×深さは1.2×0.9×0.1m、主軸方向はN—7°—Wである。

第24号土壙はG7グリッドに位置する。平面形は楕円形である。長径×短径×深さは1.6×1.4×1.7mである。深度のある土壙である。底面は平坦である。主軸方向はN—61°—Wである。

第25号土壙はG9グリッドに位置する。平面形は不整円形、断面形は皿状であり、やや凹凸がある。長径×短径×深さは1.1×1.0×0.2mである。

第26号土壙はG7グリッドに位置する。平面形は不整円形である。底面は平坦である。長径×短径×深さは1.2×1.1×0.2mである。

第27号土壙はG8グリッドに位置する。平面形は不整円形である。底面は平坦であり、やや深度がある。径1.0m、深さ1.1mである。

第28号土壙はG8グリッドに位置する。平面形は円形、底面は平坦である。径0.9m、深さ0.5mである。

第29号土壙はI7・8グリッドに位置する。平面形は不整の長方形である。長径×短径×深さは1.4×0.7×0.2mである。主軸方向はN—29°—Wである。

（3）その他（第36図）

G5グリッドからG6グリッドにかけて、第3号溝付近で柱穴が見つかっている。出土遺物はなかったが、溝との覆土の共通性から中・近世の所産と考えられる。

深度は0.2m前後である。柱穴群と呼ぶには少なく、堀立柱建物のような規画性も確認し得なかった。この付近は竹林であったため、確認面の状況は不良であり、この程度の深度であると中・近世の建物跡は遺存していない可能性がある。

V　結語

1　縄文時代

縄文時代の遺構は後期前葉の住居跡2軒と土壙11基が見つかった。調査区南東部の狭い範囲に遺構は分布しており、集落の範囲は調査区西側には広がらない。調査区東側の斜面部分に集落が延びる可能性も残されてはいるが、大規模、継続的な集落跡を形成するにはいたらなかったのであろう。

遺構内出土土器のうち第4号上壙が称名寺式の中頃の段階と思われるが、これ以外の遺構からは称名寺式の新しい段階と堀之内1式が出土している。遺構外からは早期から後期中葉の土器が検出されているが、早期、前期、中期、後期中葉の土器はいずれも少数である。後期前葉についても称名寺Ⅰ式は少なく、堀之内1式も多条の沈線を施す新しい段階のものは少数であり、集落としての継続期間は短期であったと見られる。

さて、遺構内出土土器として第1号住居跡、第1号土壙から完形に近い土器が検出されている。堀之内1式成立前後の土器群を議論する上で一つの材料となる資料と考えられ、ここではその内容について若干のまとめをしておきたい。

第1号住居跡出土土器は称名寺式系統の深鉢形土器2個体と胴部が張り、括れ部から口縁部にかけて外反気味に立ち上がる深鉢形土器との共伴関係を示す資料である（第38図1～12）。

1の土器はスペードと鉤状のモチーフの組合せを主文様として、これを5回繰り返しており、沈線間には短沈線的な列点を連続的に施している。

スペード状、鉤状のモチーフの下位は縦位に沈線文を垂下させている。一方、主要モチーフを横位につなぐ口辺部の文様は横位の1条の沈線によってなされており、2の土器とも共通した特徴といえる。鈴木徳雄氏が称名寺式の特色として指摘される「帯状部意匠描出の原則」から逸脱している。称名寺式の第7段階の土器に対比されよう（鈴木1990a・b）。

垂下する主要モチーフを横位の沈線によってつなぐ特徴をもつ土器として、埼玉県内では北塚屋107号上壙出土土器（第39図1）があげられる（中島1983）。後述する第38図3～12などの要素とも合わせると、同じ段階の資料と考えてよいであろう。

さて、第38図1の土器の口辺部の横位沈線は主文様を描く以前に全周させるものではなく途切れがちに施され、垂下するモチーフとの施文順位もまちまちである。したがって、鉤状文やスペード状文を描きながら横位沈線も施されていることが窺える。横位沈線と交差する鉤状のモチーフの上端は横位沈線によって閉じている部分と開いている部分とがある（脱開図、図版13上段参照）。

こうした垂下する主文様をつなぐ横位沈線の施文上の特色については、口縁部の下に無文帯をおく点とともに石井寛氏が下北原遺跡（鈴木1977）の資料を説明する際に指摘されている（市川市立考古博物館1983）。

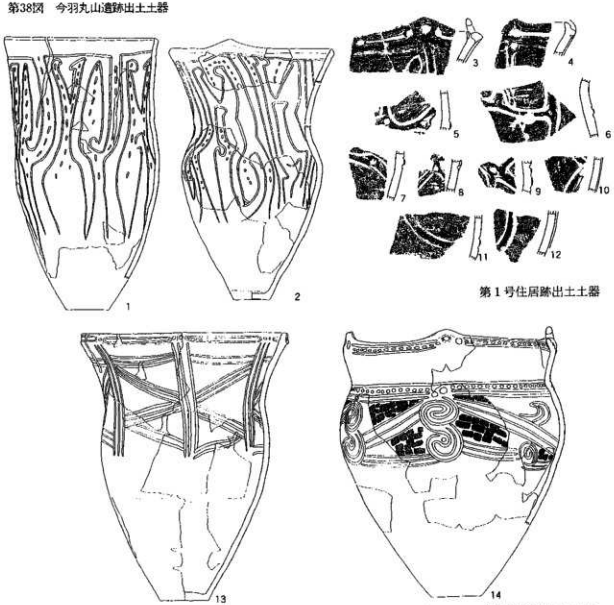
第38図1は北塚屋遺跡例に比べ、無文帯の幅が狭い。第38図2の土器は口縁部が部分的にしか残存せず、横位の沈線と垂下するモチーフとの関係が明確ではないが同様な文様構成をとるものと見られる。ただ無文帯はほとんどないと言ってよい。

無文帯については下北原遺跡の資料を見ても個体によりまちまちであり、暫移的な傾向がある。いずれにせよ、当遺跡第1号住居跡、北塚屋遺跡107号土壙の称名寺式系統の土器（第36図1、2、第37図1）は石井氏が抽出された下北原遺跡出土土器の文様施文上の傾向と同様な要素を持っており、比較的スムースに変化を辿れるのではなかろうか。

第1号住居跡出土土器と北塚屋遺跡107号土壙出土土器との相違は沈線間に短沈線的な列点を連続的に施す点である。

称名寺式の沈線間の文様要素には縄文、列点、条線等がある。「全体としては縄紋→列点→無紋という趨勢を辿るとはいえ、その存在形態は、複雑な様相を呈

第38図　今羽丸山遺跡出土土器



第１号住居跡出土土器

第１号土壙出土土器

1・2・13・14　S＝1／8　　3～12　S＝1／4

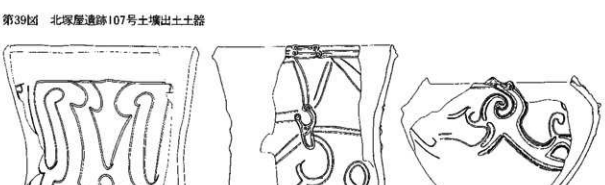
しており、一律ではな」（鈴木1990b）く、第1号住居跡出土土器のような短沈線的な列点もその出現や地域的な広がり等を整理しておくことが必要であろう。

今回はその余裕がないが、称名寺II式に限定される要素ではなく、地文縄文上に縦位に垂下する沈線文間や卵形文内部に縦位に施される例が堀之内１式、綱取２式にはしばしば見られる。施文部位が異なるとはいえ、無関係な要素とは思われず、施文手法レベルでの情報が称名寺式から堀之内1式の時期に広範囲に伝達されたと見られる。少なくとも、第1号住居跡出土土器の短沈線的な列点を連続的に施す手法と北塚屋遺跡107号土壙例のように沈線間を無文とする手法を新旧とすることは誤りであろう。

次に第38図３～12について若干の検討をしたい。

事実記載の所でふれたように色調や胎土などから３～８、９と10.11と12が確実に同一個体と考えられる。３～８については口縁部、括れ部近く、胴部の破片がある。その断面形から、胴部が張り、括れ部から上部は外反気味に立ち上がり、口縁部が「く」の字状に内折する形態の深鉢形土器と考えられる。９～12につ

第39図　北塚屋遺跡107号土壙出土土器



いては胴部の破片のみなので形態までは不明であるが、隆帯施文の特徴から一応同類と考えておく。

主文様は隆帯とこれに沿った沈線文によって施される。隆帯の断面形は稜線のない丸みを帯びた低い形状で貼付文である。口縁部の波状部直下にはＪ字状に隆帯を施し（3）、括れ部から胴部にかけて曲線的な隆帯を施している（5～12）。隆帯が交差する要所には隆帯上に点文が施される（4～9）。

こうした特徴をもった隆帯は北塚屋107号土壙出土土器にも見られる。第39図２の括れ部、３の体部に施された隆帯である。

第39図２は括れ部にＪ字状の隆帯が施されており、Ｊの下端にはさらにＵ字状に隆帯を施す。隆帯に沿った沈線は認められないが、隆帯上に点文が施され、第38図４～９などと共通する手法をとっている。２の土器自体について付言すると、口縁部が「く」の字状に内折する形態の土器で口縁部には初期的な縁帯文が施されている。破片資料の中にも口縁部に沈線文を施したものが多く、堀之内１式的な要素が強い。口辺部には斜沈線による文様が施され、胴部にはＪ字状文、斜沈線等が施されている。次の段階につながる要素であろう。

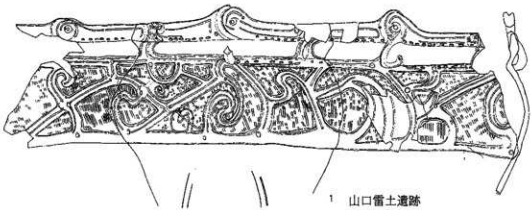
第39図３は口縁部が強く内湾する形態の浅鉢形土器である。この丸みを帯びた体部の形状は称名寺式には少数である。この種の形態の土器は気屋式を出土した真脇遺跡で多く認められる（米沢1986）。真脇遺跡出土土器の中には隆帯とこれに沿った沈線で渦巻状、Ｊ字状に文様を施した土器も見られ、当例と類似している。

隆帯の手法上の共通性から北塚屋107号土壙出土土器を見てきたが、第1号住居跡出土土器そのものに類似する土器については他遺跡を渉猟しなければならない。あいにく第１号住居跡出土土器は破片資料で全形を復原し得なかった。そこで第40図に関東の類似資料を集めてみた。

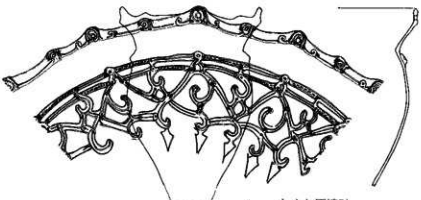
第１号住居跡の第38図３～８は波状部に円孔を施し、口縁部には点文と沈線を巡らせる。また括れ部より上の外反する口辺部にはＪ字状の隆帯が施されるが、これ以外は無文の部分が多く、胴部には隆帯により曲線的なモチーフが施される。

こうした特徴に最も近いのが第40図１の山口雷土遺跡例（大野1987）である。区画内には半截竹管による平行沈線が施されたり、隆帯上にも沈線が施され３本単位の沈線で主文様を描くなどの相違があるが、隆帯とこれに伴う点文の特徴、全体の構成、括れ部上の無文帯に垂下するＪ字状文など共通する要素が多い。

山口雷土遺跡の報告書中ではなすな原遺跡出土土器（小渕1984）が類例として比較されている。なすな原



1　山口雷土遺跡



2　なすな原遺跡

3　北の内遺跡

4
北の内遺跡

1　S＝1／8　　2～4　S＝1／6

遺跡例（第40図２）の場合も、胴部の文様は隆帯によって施文され、Ｊ字状文、スペード状文を縦位に配して展開し、これらのモチーフを斜位の隆帯によってつなげている。

山口雷土遺跡例となすな原遺跡例は口縁部の文様も隆帯、点文、沈線により施され、よく類似している。時期的には第１号住居跡の土器（第38図３～12）も含め、大差がないのではなかろうか。

この種の胴部が張り括れ部から上部は外反気味に立ち上がり、口縁部が「く」の字状に内折する形態の深鉢形土器の出自については諸氏が考察されている。かつて今村啓爾氏は「頸部が「く」の字形に強く屈折する鉢形土器のⅡa（胴上半）帯が無文化する」点を指摘され、「称名寺Ⅱ式と堀之内Ⅰ式の境」とされた（今村1977）。すなわち、称名寺Ｂ地点（吉田1960）の土器のように括れ部で上下に区画する土器の上半部

が堀之内1式では無文化するという変化を指している。こうした観点から区分すると第38図3～12、第40図は堀之内1式的と言えよう。

隆帯によってJ字状のモチーフを施す特徴は、いわゆる関沢類型との関係についても検討課題となろう。

また、口縁部が無文化する傾向は綱取式との関係も想定できよう。荒砥二之堰33号住居跡では無文の外傾する口縁部を持ち、括れ部に点列を施した隆帯が巡る綱取式系統の土器が称名寺式系統の土器に伴って出土している（石坂1985）。

隆帯による大柄なJ字状文をさらに隆帯によって連結する土器である。後述する北の内遺跡に見られる胴部主文様との類似性を指摘できよう。東北南部の土器群を検討する余裕はないが、こうした交渉関係は双方向的なものと考えられ、後続する段階では胴部が張り、無文の口辺部が外反する典型的な形態が安定して存在するようになるのであろう。

荒砥二之堰33号住居跡出土土器については阿部芳郎氏が綱取式との関係について言及されている（阿部1988）。また石井寛氏は荒砥二之堰33号住居跡の類例を「中期最終末から継続して理解されるべき土器であり、かつ堀之内1式にも引き継がれる類型である」とされている。また山口雷上遺跡例についても、大木10式からの系譜を指摘されている（石井1922）。

第40図3、4は北の内遺跡のII区2号上壙出土土器である（岩上1979）。これも無文の口辺部が外反する形態の土器の初現期の様相と見られるので参考とした。1、2との単純な比較はできないが、東北南部との比較で言うと胴部の文様は綱取2式の要素に近いものである。3については当遺跡第1号上壙出土土器との系統性が指摘できよう。北の内遺跡例を東関東的な資料である木戸作貝塚出土土器と比べると時間的な差は少ないものと考えられる。木戸作貝塚出土土器の時間的位置づけについては、見解に相違が見られ（鈴木1982、石井1992、鈴木1995）、一括資料の少ない現状では対比を重ねていく必要があろう。

地文に縄文を施す東関東的な土器やここでとりあげた無文の口辺部が外反する形態だけでなく、堀之内式の成立には谷井彪氏が検討された朝顔形の器形の深鉢形土器なども欠かせない要素であり（谷井1990）、これらを総合して堀之内1式の成立について考えなければならないだろう。それには他地域の土器の対比から有意な段階認定をする必要があり今後の課題としたいが、第38図3～8の出現をもって堀之内1式初頭とする考え方もひとつの方法かもしれない。

第1号住居跡出土土器については東北地方との対比から問題点をいくつか付け加えておきたい。

先にも少しふれたが、綱取式土器との双方向的な影響関係の中で堀之内1式や綱取2式に典型的な無文の口縁部が外反する形態の土器が成立する。こうした観点から、例えば第38図3、4にみるJ字状の隆帯は綱取式的な要素と見えないこともない。しかし、同図5～12のように胴部の隆帯を横位、斜位につなげていく文様は現状では必ずしも綱取式の組成中に多く見られる文様とは言えないだろう。

山口雷上遺跡例も同様にJ字状、もしくはそれの反転したモチーフなどを中心にX字状、曲線状に隆帯が複雑に交錯している。なすな原遺跡例もJ字状文とスペード状文を縦位に配すモチーフをX字状の隆帯によって横位に連結している。

これらの体部主要モチーフと類似する土器として、平尾遺跡例（安孫子1971）、権現原遺跡例（市川市1971）がある。平尾遺跡の報告の中で安孫子昭二氏は平尾NO9遺跡4号甕棺の体部文様の類例を青森県に求められている。また、本間宏氏は東北北半の土器群の綱取式への影響に言及される中で、権現原遺跡例や平尾NO9遺跡4号甕棺についても言及され、「X」字状文との関連を指摘されている（本間1988）。

権現原遺跡例は卵形文をX字状文でつなぎ、下端を弧線文でつなぐモチーフであり、平尾NO9遺跡4号甕棺は縦位区画の中にJ字状文を配したX字状モチーフを施す土器である。堀之内式のシンポジウムでは称名寺式の終末とされているが、堀之内1式初頭の土器と考える研究者（阿部1987）もいて、見解の分か

れる土器である。この2つの土器は綱取式の系統とされることが多いが、これらの母胎となるべき土器群については不明確な部分も多いのではなかろうか。また隆帯とこれに沿った沈線の手法（第38図3～12、第39図3、第40図1、2）が後期前葉の広い地域で行われることも興味深く、今後の課題としたい。

堀之内式のシンポジウムの時点では、堀之内1式の細分について、単独のモチーフの土器から横にモチーフを連結する土器、やがて集合沈線文の土器へという変遷観が底流をなしていたとも感じられるが、近年の諸氏の研究ではモチーフを連結する手法や下端の区画文などをめぐって称名寺式を捉え直す観点から、後続する堀之内1式を考察するものも見られ、より問題点が深められているといえよう。

単位文をつなぐモチーフの出現に関して、谷井彪氏は愛谷遺跡の上器（市川市立考古博物館1983）について言及され、J字状のモチーフをつなぐ斜行文の系譜を大木10式に求めている（谷井1990）。そして、「縦位区画線単位文とその間をつなぐ斜行線のモチーフの組合せは、堀之内I式土器の基本文様構成」であり、「独立した単位文間をつなぐという意識の出現と同時にこの斜行文が様々な変貌をとげ、堀之内式で採用される各種モチーフへと展開」することを指摘されている。独立した単位文をつなぐ手法は後期初頭段階から見られ、各種の上器が出現することになる。

石井寛氏も称名寺式の変遷過程の中に大木10式の系譜を加えて文様帯下端処理の問題等を考察されており、大局では「「関沢類型」から変化した一群、規定の問題を残す綱取1式、そして大木10式の構成を伝える一群が加わりながら堀之内1式へと推移していく」とされている（石井1992）。

こうした動向を踏まえながら、次に第1号土壙出土の堀之内1式について見ていこう。

第38図13の土器は関東地方の中央部から西部にかけて多くの類例が認められる土器である。先行する平尾NO9遺跡4号甕棺に見るような縦位区画の中にX字状のモチーフを施す土器の系譜から成立した土器であろう。平尾遺跡例はJ字状のモチーフがX字状文に付加されたが、第38図は縦位沈線が多用されるようになり、前段階の様相を払拭している。

第38図14の土器は胴部が張り、括れ部から外反気味に立ち上がり、口縁部が「く」の字状に内折する形態の深鉢形土器である。前段階の様相についてはこれまでにふれてきたが、当例の前段階として北の内遺跡例（第40図3）の主文様が考えられる。モチーフをつなぐ斜沈線や下端の区画文が踏襲されている。主要モチーフはJ字状文から渦巻状文に変化している。一筆書きのようにして渦巻状文が施されている点にJ字状文の施文法が踏襲されているとみられる。

このように第1号土壙出土土器においては後期初頭以来のJ字状文が縦位沈線の多用や渦巻状文などに変化する様相を見ることができる。

しかし、文様の基本構成に関わる縦位区画文、下端区画文、斜線による連結文などは第40図やこれまでにふれてきた土器に見るように前段階には確実に存在し、連続的とも言えよう。したがって、細部については大いに検討すべき問題はあるかと思うが第1号住居跡と第1号土壙出土土器の間にさらに1段階なりの変遷を挟むことは難しいようにも考えられる。冒頭で述べたとおり、当遺跡は比較的短期の小規模な遺跡であり、第1号住居跡の段階から第1号土壙の段階を経て、縄文時代の集落が終焉したものと考えられる。

検討することができなかったが、称名寺式の論文は数多く、堀之内1式の細分についても近年、諸氏によって活発に行われている（領塚1992）。また称名寺式、堀之内式との影響関係が強い綱取式の細分については馬目順一氏をはじめ（馬目1982他）、近年では福島雅儀氏（福島1989）、本間宏氏（本間1990他）、仲田茂司氏（仲田1992）の考察がある。

今羽丸山遺跡第1号住居跡出土土器から第1号土壙出土土器への変化をめぐる課題は数多い。当遺跡の土器を分類するにあたって他地域との比較を通じ、有意な段階設定をする必要があったが力不足であった。諸氏による研究の検討を含め、今後の課題としたい。

2　平安時代

今回の調査では、平安時代の住居跡が1軒検出され、土師器の甕と坏、須恵器坏が1点、須恵系土師質土器が5点（坏3点、高台付坏が2点）、砥石が1点、土製支脚が1点出土している。

この内、須恵器については白色針状物質を全く含まず、石英粒と長石と考えられる白色粒子を多く含み、後述するように南比企窯跡群操業停止後の時期であるため、それ以外の窯跡からの供給と考えられる。小破片であるため、生産窯の決定、時期の判断は行い難い。

須恵系土師質土器は、須恵器と土師器の中間的な半還元状態のものが4点で、完全な酸化焔焼成のものは1点のみである。これらの法量は口径12.5～15.0cm、器高4.7～6.0cm、底径4.7～5.6cmで、高台の高さは1cm前後である。須恵系土師質土器の編年的位置付けについて、水口由紀子氏の編年（水口1991）を参考にすると、その法量と器形から氏のII段階第2小期に当てられる。また、本遺跡近傍に位置するほぼ同時期の氷川神社東遺跡（渡辺・宮崎・山形1993）出土資料の宮崎由利江氏による編年では、2期の資料ほど体部が残くなく、3期の特徴とされるほど法量が均一でなく、高台もそれほど高くないことから、その2～3期の過渡期と考えられる。須恵系土師質土器の絶対年代ついては、研究者によってかなりの幅がある。

ここでその問題について具体的に言及する用意はないため、改めて扱うこととし、本遺跡出土資料を水口、宮崎両氏の見解によって大まかに位置付けるに留めたい。水口氏はII段階第2小期の時期を灰釉陶器の年代を参考に10世紀半ばから後半代に置く。宮崎氏は、新久窯跡で焼台に使われた国分寺再建瓦や市原市稲荷台遺跡出土の貞観十七年銘の酸化焔焼成皿から2期を9世紀後半から10世紀前半、3期の円盤状底部の坏が10世紀末から11世紀初頭とされることから、その年代を11世紀前半とする。この両者の見解から、ここではとりあえず本遺跡出土資料の位置を10世紀とするに留めたい。

土師器甕は全形は不明だが、「コ」の字状口縁の後に展開する「く」の字状口縁のものであり、須恵系土師質土器の編年的な位置付けと齟齬はない。内面黒色処理された坏については、この個体のみでの位置付けは、筆者の現在の力量では行い難く、後日を期したい。

本遺跡における須恵器、須恵系土師質土器の様相とほぼ同様の様相は、前述したように、遺跡近傍では氷川神社東遺跡で認められる。氷川神社東遺跡の該期の土器について宮崎由利江氏は、焼成土坑が検出されている御蔵山中遺跡（宮崎・山形・山口・渡辺1989）、東北原遺跡（山口1991・宮崎・山形・笹森1993）から供給されたとしている。本遺跡はこの東北原遺跡の至近に位置するため、同遺跡からの供給が考えられる。また、寿能泥炭層遺跡（埼玉県教育委員会1984）からも同様の須恵系土師質土器が出土しており、やはり両遺跡からの供給が考えられる。上述の遺跡群における生産→供給関係は、当時の供膳器の生産・流通の一端を示すものである。

同様の様相は狭山市森坂（蓍上1996）→坂東山・坂東山西（鈴木1996）遺跡でも認められる。該期の供膳器を中心とする土器の生産・流通関係は、これらの小地域内における類例の集積と内部における上器群の検討、地域間相互の検討比較により明らかになると考えられる。

また、この問題を考える上では、やはり須恵器窯の解体を視野に入れない訳にはいかない。高橋一夫氏（高橋1991）や渡辺一氏（渡辺1995）は、これらの本来窯業が発達していなかった地域における須恵系土師質土器の盛行する要因として、律令制度を後ろ盾としてきた須恵器工人集団の解体と生産体制の崩壊をあげる。須恵系土師質土器は脈々と続いて来た律令体制下の焼物である須恵器の残滓なのである。

このような大きな時代背景を踏まえ、先の検討を重ねた上で、本遺跡出土資料を再度位置付けることにしたい。

引用・参考文献

青木秀雄　1977　「称名寺式土器の再検討」『埼玉考古』16　埼玉考古学会

青木秀雄　1982　「4　南関東西北部」『シンポジウム堀之内式土器資料集―各地の堀之内式とその変遷―』

青木美代子　鈴木仁子1985　『三番耕地・十八番耕地・十二番耕地・神山』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第43集

赤石光資他　1978　『秩父山遺跡』上尾市文化財調査報告第5集　上尾市教育委員会

浅野晴樹　1986　「北武蔵における古代末期の土器様相」『神奈川考古』第21号　神奈川考古同人会

安孫子昭二　1971　『平尾遺跡調査報告書Ⅰ』　平尾遺跡調査会

阿部芳郎　1987　「縄文時代後期前葉型式群の構造と動態」『駒台史学』第71号

阿部芳郎　1988　「堀之内1式の土器の構成と変遷」『信濃』第40巻第4号

石井　寛　1982　「5　南関東西南部」『シンポジウム堀之内式土器資料集―各地の堀之内式とその変遷―』

石井　寛　1992　「称名寺式土器の分類と変遷」『調査研究集録』第9冊　横浜市埋蔵文化財センター

石坂　茂他　1985　『荒砥二之堰遺跡』　財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

市川市史編纂委員会　1971　『市川市史　第一巻　原始・古代』

市川市立考古博物館　1983　『シンポジウム　堀之内式土器の記録』

今村啓爾　1977　「称名寺式土器の研究」（上・下）『考古学雑誌』第63巻第1・2号

岩上照朗他　1979　『北の内遺跡』栃木県埋蔵文化財報告書第31集　栃木県考古学会

大野雄男　1987　『山口富士遺跡』　財団法人千葉県文化財センター

大宮市役所　1968　『大宮市史　第一巻　考古編』

吉上元博　1996　『八木上／八木／八木南／上広瀬北／森坂北／森坂』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第165集

小渕忠秋他　1984　『なすな原遺跡』　なすな原遺跡調査会

小宮山克己他1995　『宿前田遺跡』上尾市遺跡調査会調査報告書第14集

埼玉県上尾市1992　『上尾市史　第一巻　資料編1　原始・古代』

埼玉県教育委員会　1984　『芳能泥炭層遺跡発掘調査報告書―人工遺物・総括編―（遺構・遺物）』

斉藤弘道　1982　「2　北関東」『シンポジウム堀之内式土器資料集―各地の堀之内式とその変遷―』

鈴木徳雄　1982　「3　南関東東部」『シンポジウム堀之内式土器資料集―各地の堀之内式とその変遷―』

鈴木徳雄　1990a　「称名寺・堀之内1式研究の諸問題―南関東地域の資料を中心として―」『第4回縄文セミナー―縄文後期の諸問題』　縄文セミナーの会

鈴木徳雄　1990b　「称名寺式土器」『調査研究集録第7冊　称名寺式土器に関する交流研究会の記録』　横浜市埋蔵文化財センター

鈴木徳雄　1991　「称名寺式の変化と文様帯の系統―「文様帯系統論」と文様帯連続説の再検討―」『上野考古』16

鈴木徳雄　1994　「称名寺式の形制と施文域―文様構成の地域的伝統と型式変化―」『東海大学校地内遺跡調査団報告4』

鈴木徳雄　1995　「称名寺式における充填列点紋の成立―文様の統合方法と変容過程―」『群馬考古学手帳』5

鈴木秀雄　1996　「坂東山／坂東山西／後B」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第166集

鈴木保彦　1977　「下北原遺跡」神奈川県埋蔵文化財調査報告13　神奈川県教育委員会

高橋一夫　1991　「埼玉における古代窯業の展開」『埼玉考古学論集』　（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団

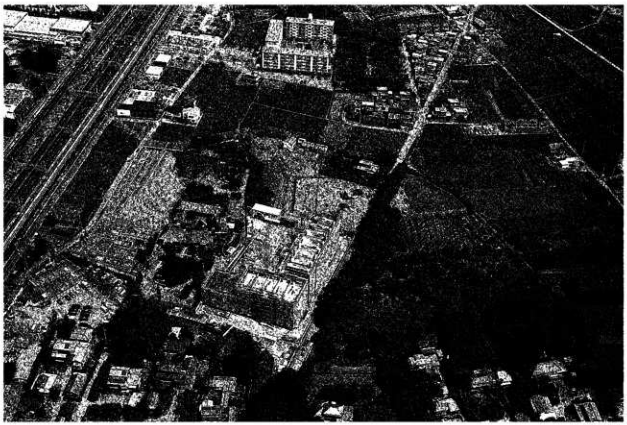
田代治　小川岳人　1995　『大和田陣屋跡　今羽丸山遺跡』大宮市遺跡調査会報告第52集

立木新一郎　田代治他1983　『大宮公園内遺跡発掘調査報告』大宮市遺跡調査会報告第8集

立木新一郎他1983　『鷲山遺跡発掘調査報告』　大宮市遺跡調査会報告第6集

立木新一郎　森下昌一郎　1986　『東北原遺跡発掘調査報告—第6次調査—II』大宮市文化財調査報告第21集
立木新一郎　山形洋一他　1985　『東北原遺跡発掘調査報告』大宮市文化財調査報告第19集
谷井　彪　1977　「称名寺式土器の推移」『埼玉県立博物館紀要』3
谷井　彪　1990　「行田市稲荷山郷遺跡出土縄文後期の土器について」『調査研究報告』第7号　埼玉県立さきたま資料館
中島　宏　1983　『堀屋・北塚屋遺跡』財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第25集
仲田茂司　1992　「V考察」『西方前遺跡III　縄文時代中期末葉の集落跡　本文編』　三郷町教育委員会
橋本　勉　1984　『久台遺跡』財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団発掘調査報告第36集
堀部実喜　1988　「関東地方における平安時代後期の土器様相」『神奈川考古』第24号　神奈川考古同人会
福島雅儀　1989　「第3章第5節　縄文時代後期前半の土器」『柴原A遺跡（第1次）折ノ内遺跡』福島県文化財調査報告書第217集
本間　宏　1988　「縄文時代後期初頭土器群の研究（2）」『よねしろ考古』第4号
本間　宏　1990　「東北地方南部における縄文後期前葉土器群の変遷過程」『第4回縄文セミナー　縄文後期の諸問題』縄文セミナーの会
松本富雄他　1981　『新開遺跡I』三芳町埋蔵文化財調査報告11　三芳町教育委員会
松本富雄他　1982　『新開遺跡II』三芳町埋蔵文化財調査報告12　三芳町教育委員会
馬目順一　1982　「1　南東北」『シンポジウム堀之内式土器資料集—各地の堀之内式とその変遷—』
水口由紀子　1991　「武蔵国における中世成立期の煮炊土器小考」『埼玉考古学論集』　(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団
宮崎由利江・山形洋一・山口康行・渡辺正人　1989　『御蔵山中遺跡—I—』大宮市遺跡調査会報告第26集
宮崎由利江・山形洋一・笹森紀巳子　1993　『深作稲荷台遺跡・東北原遺跡—第9次調査—』大宮市遺跡調査会報告第40集
柳沢清一　1977～79「称名寺式土器論」『古代』63・65・66・68
山形洋一　渡辺正人　1989　『B—101号遺跡　B—7号遺跡』大宮市遺跡調査会報告第28集
山口康行　1991　「東北原遺跡—第5次調査—」大宮市遺跡調査会報告第2集　大宮市遺跡調査会
吉田　格　1960　「称名寺貝塚発掘調査報告」『東京都武蔵野市郷土館調査報告書』第一冊　武蔵野文化協会
米沢義光　1986　「第14群上器　気屋式期」『石川県能登町　真脇遺跡』　能登町教育委員会　真脇遺跡発掘調査団
鶴塚正浩　1992　「堀之内貝塚出土の堀之内式土器」『堀之内貝塚資料図録』　市立市川考古博物館
渡辺　一　1995　「武蔵国須恵器生産の各段階」『王朝の考古学』　大川清博士古稀記念会　雄山閣出版
渡辺正人・宮崎由利江・山形洋一　1993　『氷川神社東遺跡・氷川神社遺跡・B—17号遺跡』大宮市遺跡調査会報告第42集

写真図版

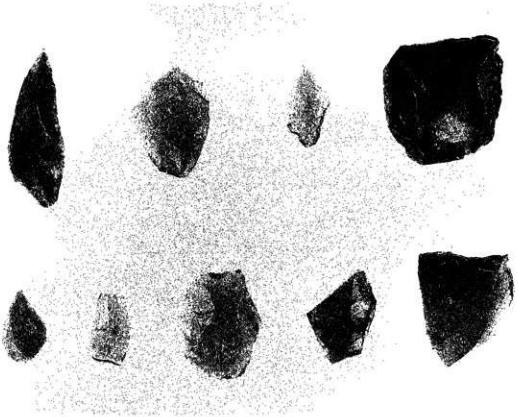


遺跡全景

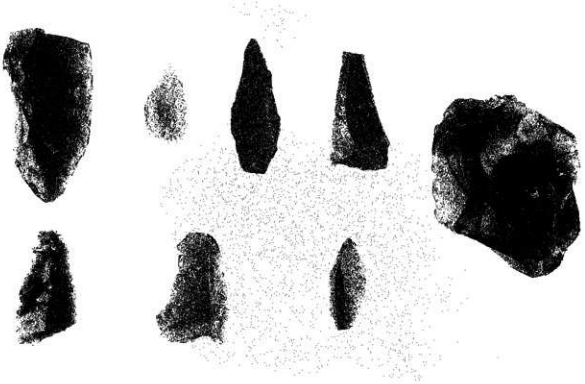
遺跡全景

遺跡近景　遺構確認時

遺跡近景　完掘時



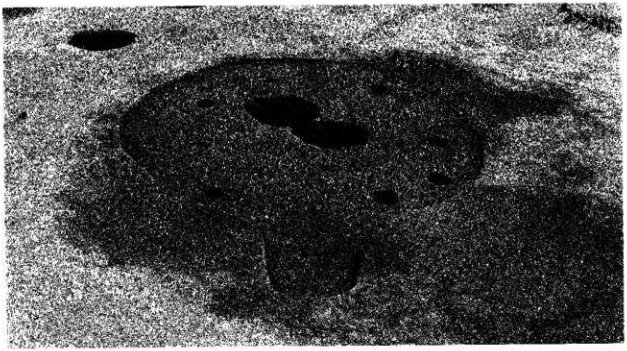
先土器時代　出土石器　第12図



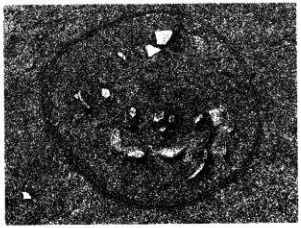
先土器時代　出土石器　第13図

第Ⅰ号住居跡

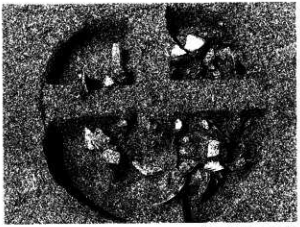
第Ⅰ号住居跡炉跡　遺物出土状況



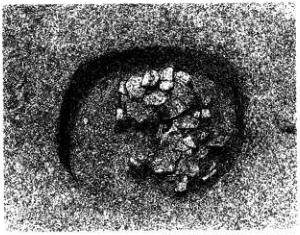
第２号住居跡



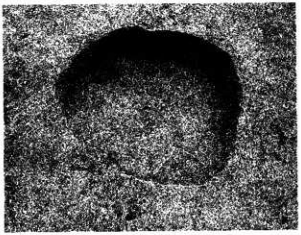
第１号土壙確認時



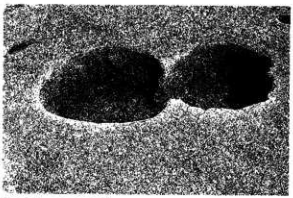
第１号土壙の調査



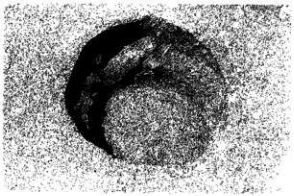
第１号土壙遺物出土状況



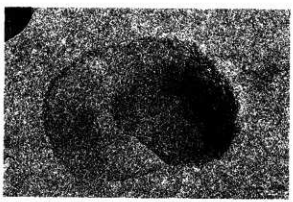
第１号土壙完掘



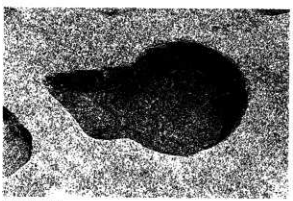
第2号・第3号土壙



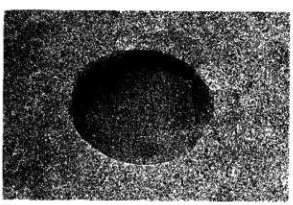
第4号土壙



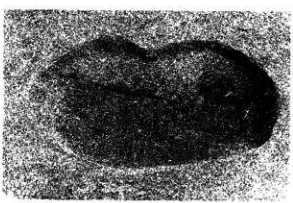
第5号土壙



第7号土壙

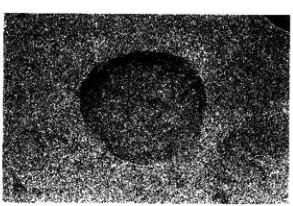


第8号土壙

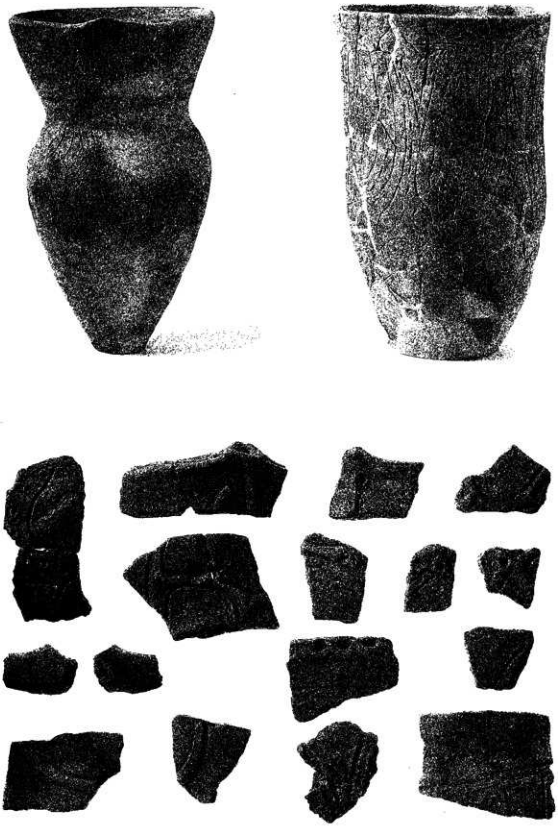


第9号土壙

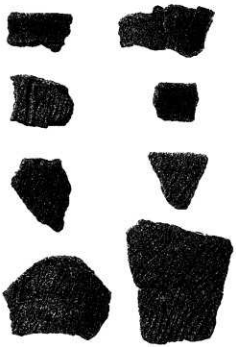
第10号土壙



第11号土壙

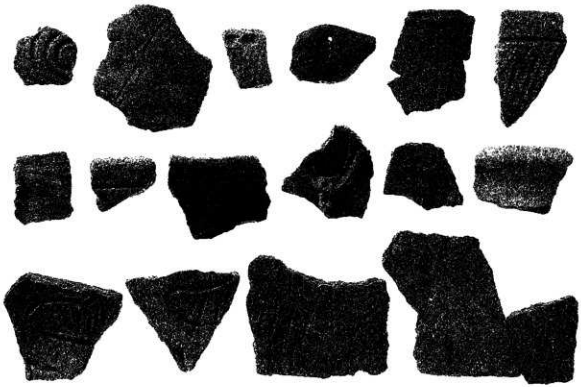


第１号住居跡出土土器　第16図・第17図

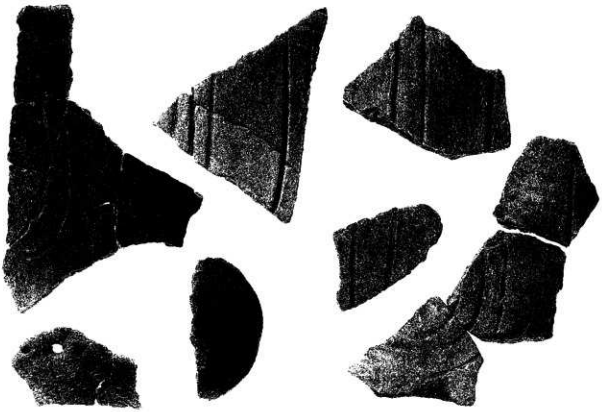


第２号住居跡出土土器　第19図

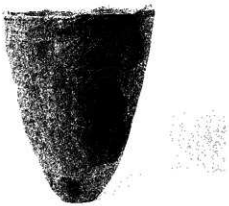
第１号土壙出土土器　第21図



第２号～第５号土壙出土土器　第22図・第23図



第７号・第８号土壙出土土器　第23図

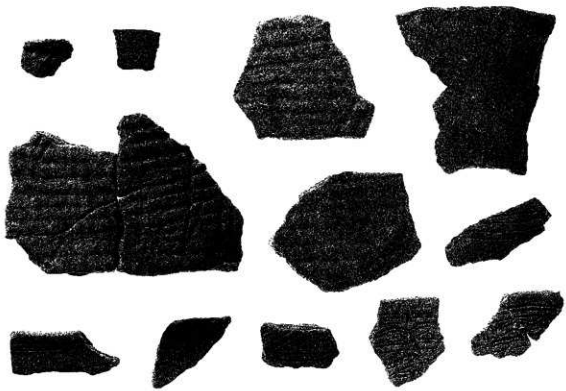


第２号土壙出土土器　第22図

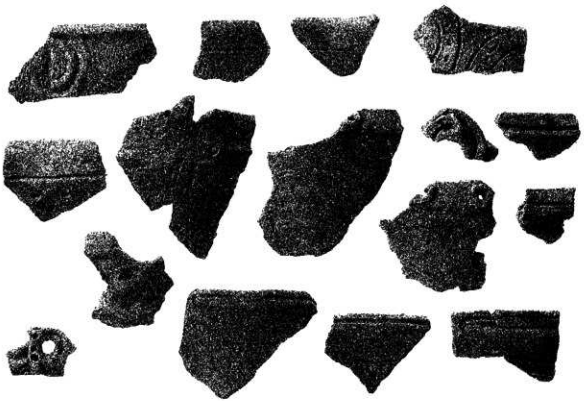
第２号土壙出土土器　第22図

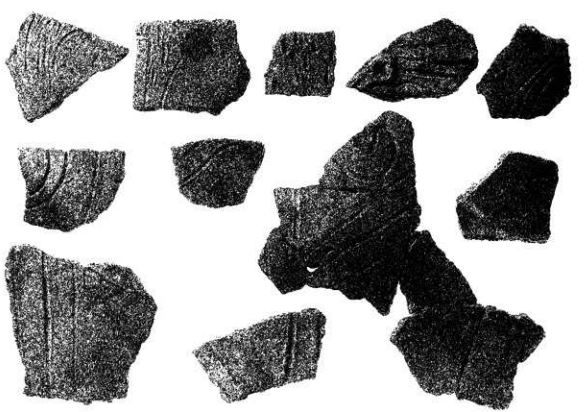
第７号土壙出土土器　第24図

第７号土壙出土土器　第24図

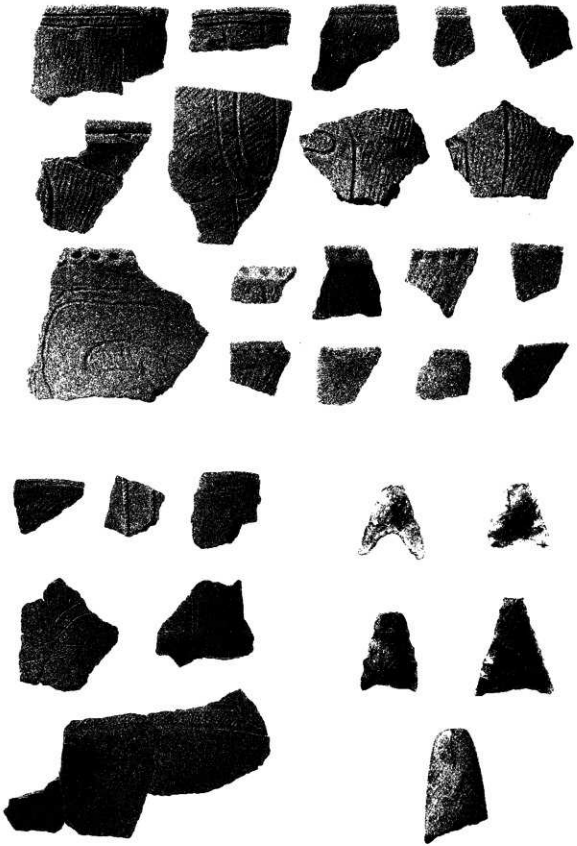


遺構外出土遺物　第25図・第26図

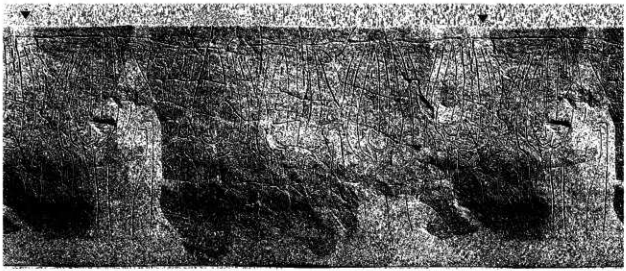




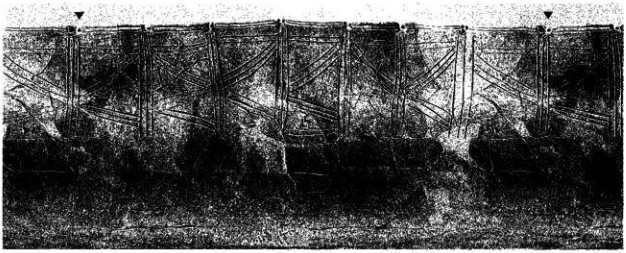
遺構外出土遺物　第27図・第28図



遺構外出土遺物　第29図～第31図

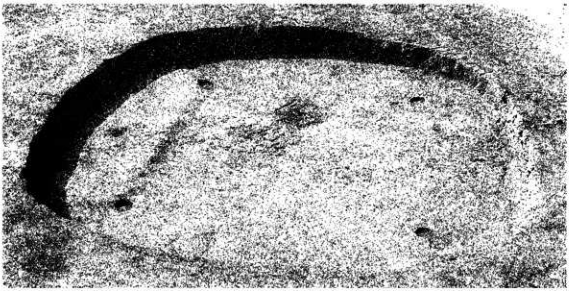


第Ⅰ号住居跡出土土器

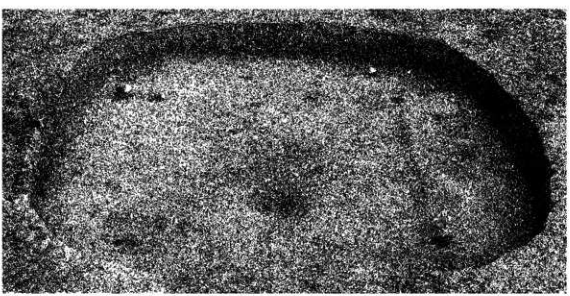


第Ⅰ号土壙出土土器

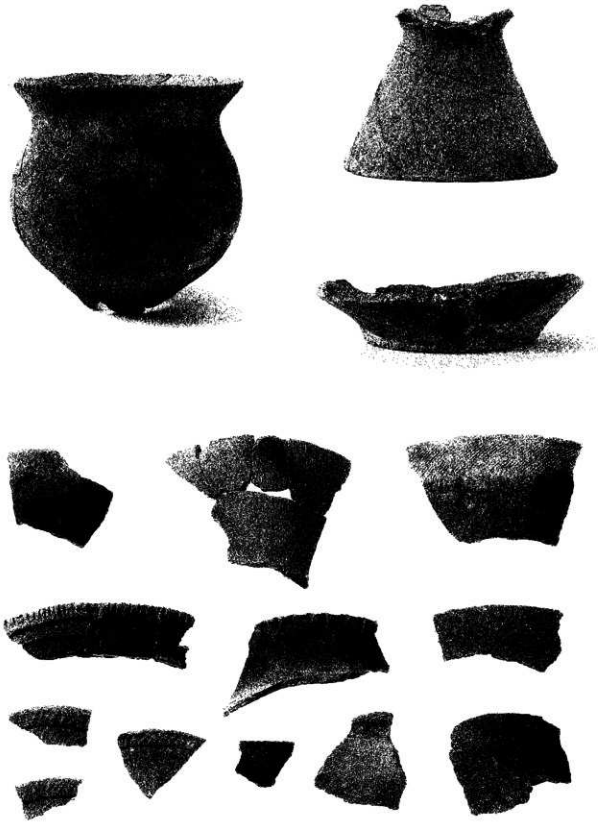
第Ⅰ号土壙出土土器
縄文土器展開写真（撮影・小川忠博氏）



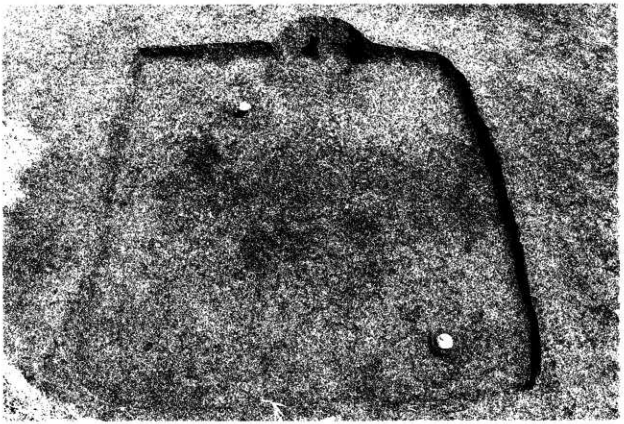
第３号住居跡完掘状況



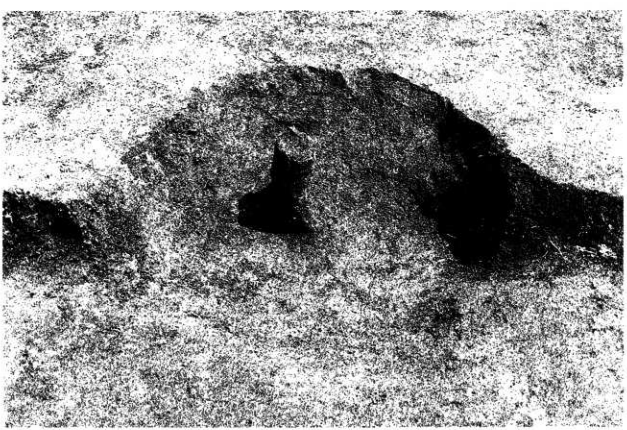
第３号住居跡遺物出土状況



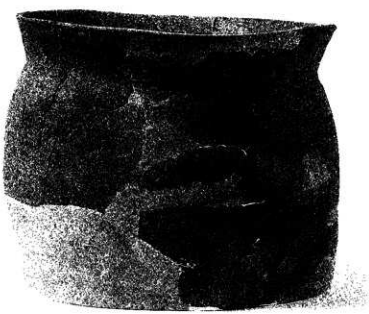
第３号住居跡出土土器　第33図



第 4 号住居跡検出状況



第 4 号住居跡カマド検出状況



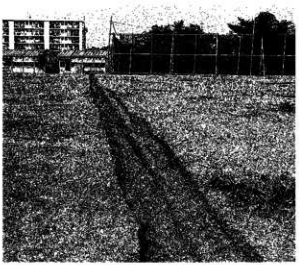
第４号住居跡出土遺物　第35図

第１号～第３号溝

第１号溝

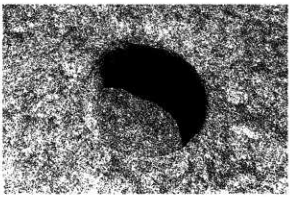
第２号溝

第１号・第３号溝

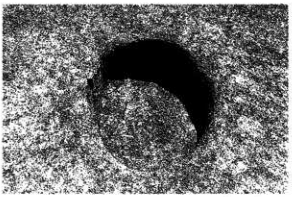


第３号溝（南から）

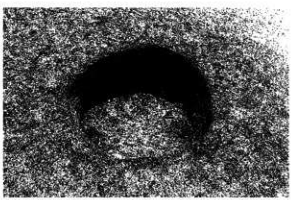
第３号溝（北から）



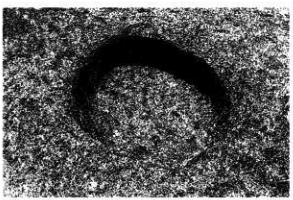
第14号土壙



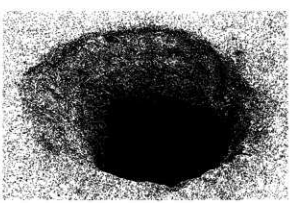
第15号土壙



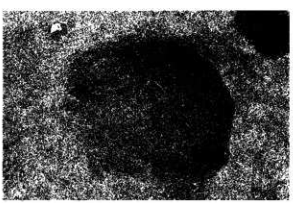
第20号土壙



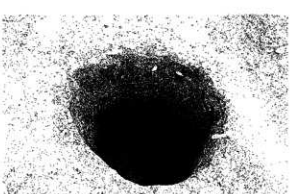
第21号土壙



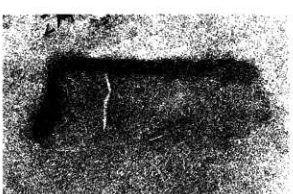
第24号土壙



第26号土壙



第27号土壙



第29号土壙

報告書抄録

ふりがな	こんぱまるやまいせき
書名	今羽丸山遺跡
副書名	県営大宮今羽団地関係埋蔵文化財発掘調査報告
巻次	
シリーズ名	埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書
シリーズ番号	第173集
編著者名	新屋雅明
編集機関	財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団
所在地	〒369-01　埼玉県大里郡大里村大字箕輪字船木884　TEL 0493-39-3955
発行年月日	西暦1996（平成8）年3月29日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
今羽丸山遺跡（こんぱまるやまいせき）	埼玉県大宮市今羽117番地2他（さいたまけんおおみやし こんぱ ばんち ほか）	11205	468	35°56′59″	139°37′30″	19940401～19940930	4,900	団地建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
今羽丸山	集落跡	旧石器時代	石器集中　4	ナイフ形石器　尖頭器 掻・削器　石核　剥片	
		縄文時代後期	竪穴住居跡 2 土壙　11	土器 石器	
		弥生時代	竪穴住居跡 1	土器	
		平安時代	竪穴住居跡 1	土器 支脚 砥石	
		中近世	溝　3 土壙　18		

埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第173集

大宮市

今羽丸山遺跡

県営大宮今羽閑地関係埋蔵文化財発掘調査報告

平成8年3月15日　印刷
平成8年3月29日　発行

発行／財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団
〒369-01 大里郡大里村大字箕輪字船木884
電話　0493（39）3955

印刷／新日本印刷株式会社